長田神社境内遺跡第17次発掘調査報告書

－神戸市長田区大塚町４丁目における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

２００８

神戸市教育委員会

長田神社境内遺跡第17次発掘調査報告書

－神戸市長田区大塚町４丁目における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

２００８

神戸市教育委員会

序

神戸港を窓口として、新しい文化を受け入れて発展してきた神戸市は、今年開港140周年を迎えました。先進的な側面をもつと共に、市内には貴重な文化財が数多く所在し、豊かな歴史を有する街でもあります。

長田神社境内遺跡は、長田区に所在する延喜式の式内社である長田神社付近に広範囲に確認されている遺跡で、これまでの調査から旧石器時代から近世までの人々の生活の痕が確認されています。

今回の発掘調査は、民間マンション建設に伴うもので、調査の結果、古墳時代と中世を中心とした遺構、遺物が確認されました。本書が地域の歴史研究、あるいは文化財の保護、普及啓発の資料として、市民の皆様をはじめ、多くの方々に広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書の作成にご協力いただきました、事業主である株式会社イー・グループをはじめ、関係諸機関に対し、厚く御礼申し上げます。

平成20年12月

神戸市教育委員会

例　言

1．本書は、神戸市長田区大塚町４丁目４，５－２で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。
2．現地における調査は、平成20年１月９日から平成20年２月15日の期間で実施し、神戸市教育委員会文化財課　阿部　功が担当した。
3．遺物整理作業は、平成20年度に神戸市埋蔵文化財センターで実施し、文化財課　黒田恭正、佐伯二郎、阿部が担当した。遺物写真の撮影は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所　牛嶋　茂氏の指導の下、西大寺フォト　杉本和樹氏が行なった。但し、遺物写真のうち、鉄製小皿のX線写真は文化財課中村大介が撮影した。
4．本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の１地形図「神戸首部」、「神戸南部」、神戸市発行の2,500分の１地形図、「夢野」、「長田」を使用した。
5．本書に用いた方位・座標は、平面直角座標系世界測地系で、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で示した。
6．本書の執筆は、「第２章　調査の成果」のガラス玉、鉄製小皿については、中村大介の助言の下、阿部が執筆した。これ以外は阿部が担当し、編集を行なった。出土遺物ならびに図面・写真は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
7．発掘調査の実施ならびに本書の刊行に際しては、共同住宅建設の事業主である株式会社イー・グループに多大なるご協力を頂いた。記して感謝を申し上げます。
8．現地での調査、本書の作成については下記の方々にご教示を頂いた。記して深謝を申し上げます。
土井光一郎　橋詰清孝（五十音順敬称略）

目　次

序
例言
目次
第１章　はじめに……1
　第１節　長田神社境内遺跡の立地と歴史的環境……1
　　(1) 遺跡の立地……1
　　(2) 歴史的環境……2
　　(3) 長田神社境内遺跡の概要……5
　第２節　調査に至る経緯と経過……8
　　(1) 調査に至る経緯……8
　　(2) 調査組織……8
　　(3) 調査の経過……8
第２章　調査の成果……11
　第１節　基本層序……11
　第２節　古墳時代の遺構と遺物……13
　第３節　中世の遺構と遺物……15
　第４節　谷状地形……17
第３章　まとめ……23
　第１節　古墳時代の遺構と遺物……23
　　(1) 古墳時代前期の遺物……23
　　(2) 古墳時代後期の遺物と古墳群との関連性……23
　第２節　中世の遺構と遺物……25
　　(1) 中世の遺物と祭祀……25
　　(2) 長田神社との関係……25
　第３節　おわりに……27

挿　図　目　次

fig. 1　長田神社境内遺跡の位置 …… 1
fig. 2　周辺の主な遺跡（S=1:25,000） …… 3
fig. 3　長田神社境内遺跡調査位置図（S=1:4,000）…… 6
fig. 4　調査風景（写真） …… 9
fig. 5　調査区東・南壁断面図 ……12
fig. 6　遺構平面図 ……13
fig. 7　SK03平面･断面図 ……14
fig. 8　SK09平面・断面・立面図・出土遺物……14
fig. 9　SX01出土遺物……14
fig.10　SK06平面・断面・立面図……15
fig.11　SK06出土遺物 ……16
fig.12　SP73出土遺物 ……16
fig.13　谷１・２平面・断面図 ……18
fig.14　谷１出土遺物 ……19
fig.15　谷２遺物集中地点１平面・断面図・出土遺物 …20
fig.16　谷２遺物集中地点２平面・断面図・出土遺物 …21
fig.17　谷２出土遺物 ……21
fig.18　谷出土遺物 ……22
fig.19　旧河道出土遺物 ……22
fig.20　SK06・谷２遺物集中地点遺物出土状況図 ……25

表　目　次

表１　長田神社境内遺跡調査次数表…… 7

写真図版目次

図版１　調査地全景（南から）
　　調査地東半部全景（南東から）
図版２　SK03（北西から）
　　SK09（西から）
図版３　SK06（北西から）
　　谷２遺物出土状況（北から）
図版４　谷２遺物集中地点１（北西から）
　　谷２遺物集中地点２（北から）
図版５　SK09出土遺物
　　SX01出土遺物
　　谷１出土遺物
図版６　SK06出土遺物
図版７　谷２遺物集中地点１出土遺物
　　谷２遺物集中地点２出土遺物
　　谷２遺物集中地点２出土鉄製小皿
　　谷２遺物集中地点２出土鉄製小皿X線透過像
　　谷２遺物集中地点２出土鉄製小皿
図版８　谷２出土遺物
　　谷出土遺物

第１章　はじめに

第１節　長田神社境内遺跡の立地と歴史的環境

(1) 遺跡の立地

長田神社境内遺跡は、神戸市長田区大塚町、長田町、宮川町付近に所在する縄文時代から近世にかけての遺跡である。

大阪湾岸に東西に連なる六甲山系の西部に位置する標高328mの高取山は、長田区北部にひと際目立つ独立峰的な景観を見せている。市街地にも近いことから毎日登山やハイキングなど市民やハイカーに親しまれている。高取山の東麓と六甲山系から南へ派生した山塊は苅藻川により侵蝕されて谷を形成し、平野部へと流れ出た苅藻川は長田区南部に扇状地を形成している。長田神社境内遺跡はこの扇状地の扇頂部付近に立地する。尚、苅藻川は明治34年（1901）の湊川流路付替工事により、現在は長田町１丁目付近で新湊川と合流して南流する。付近は古くから住宅地化が進んだ地域である。

長田区長田町には事代主尊を祀る延喜式の式内社である長田神社が所在し、神事の追儺式（県指定重要無形民俗文化財）が広く知られている。また古神輿（国指定重要文化財）が伝えられ、境内には弘安９年（1286）銘の石燈籠（県指定重要文化財）が所在する。また、境内のクスノキは市指定天然記念物に指定されている。

長田神社境内遺跡は、長田神社社殿が大正13年（1924）に火災により焼失し、大正15年（1926）の再建工事に伴い、整地が行なわれた際に発見された遺跡で、土器類が出土したと伝えられている。

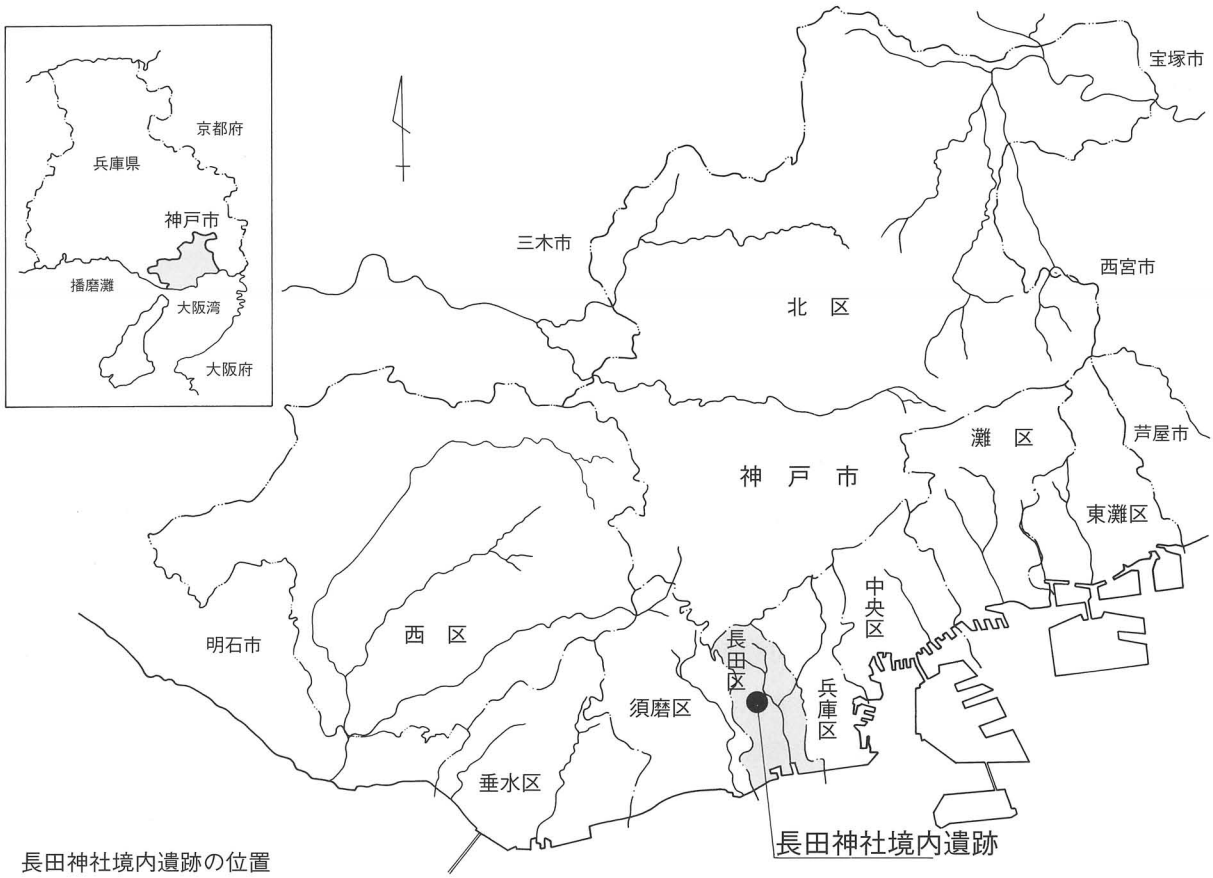


fig.1　長田神社境内遺跡の位置

(2) 歴史的環境

長田神社境内遺跡が立地する長田区北部は、神戸市内でも濃密に遺跡が分布する地域のひとつである。近隣の遺跡から調査地付近の歴史的な概観を見てみたい。

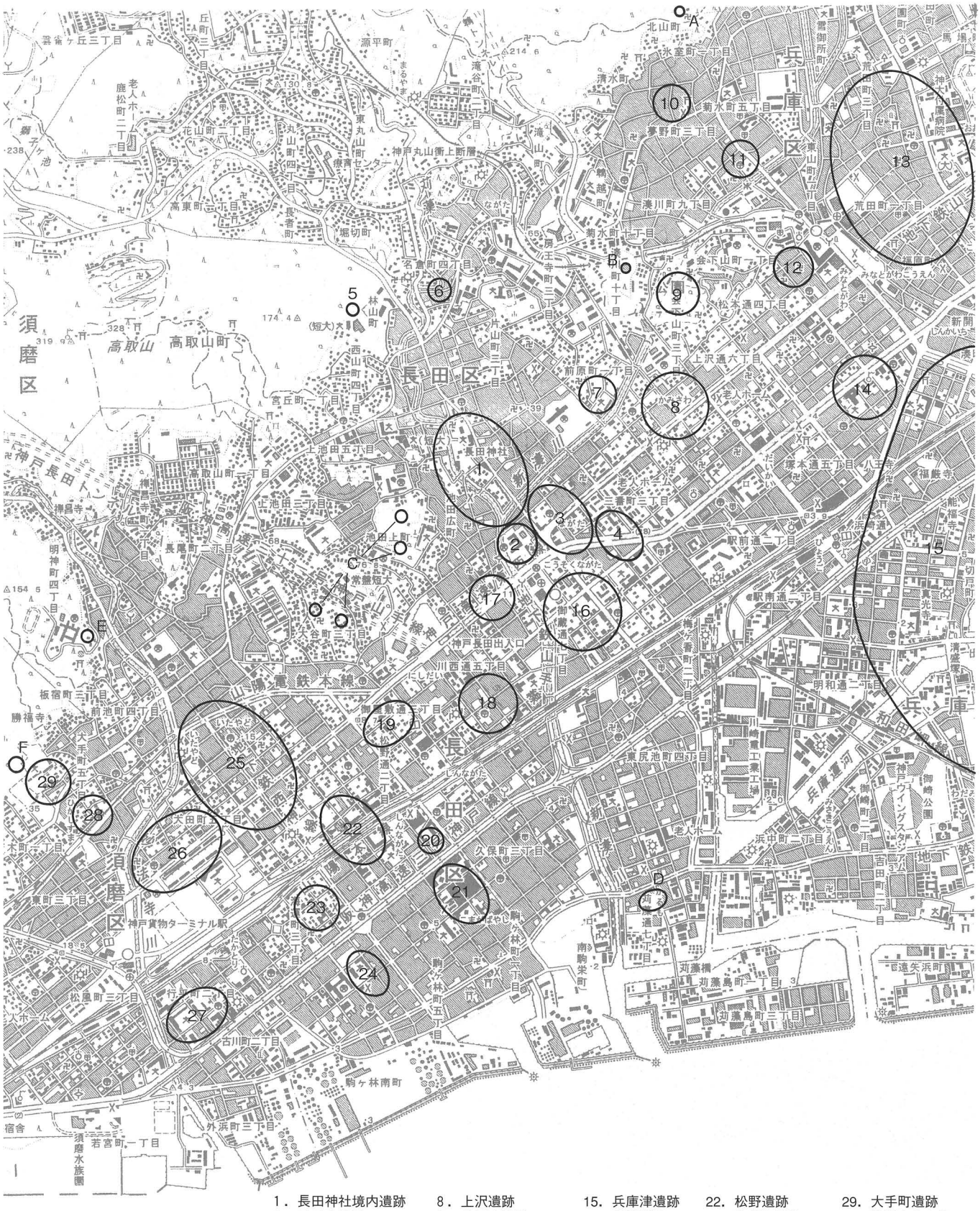
旧石器時代　これまでに知られている最古の生活の痕跡は、会下山遺跡[1]においてサヌカイト製国府型ナイフ形石器が採集され、長田神社境内遺跡から尖頭器が出土している。

縄文時代　縄文時代については、大手町遺跡で早期の神並上層式と考えられる山形押型文土器片が出土している[2]。前期の様相は明らかではない。中期には名倉遺跡から土器片が採集されている[3]。楠・荒田町遺跡[4]では中期に遡るものと考えられる土器片、後期の土坑などの遺構、遺物が確認されている。晩期後半～弥生時代前期にかけては、遺跡数も増加し、楠・荒田町、上沢[5]、三番町[6]、五番町[7]、長田神社境内、御蔵[8]、戎町[9]、大手町などの遺跡から土坑、溝などの遺構や、突帯文土器が出土している。

弥生時代　縄文時代晩期末～弥生時代前期には、大開遺跡[10]で環濠を伴う集落が形成される。近畿で最古段階の環濠集落として注目された。縄文時代と弥生時代の接点を考える上で重要な資料となっている。前期後半には二葉町遺跡[11]でも遺構、遺物が確認されている。前期末～中期には楠・荒田町遺跡が西摂地域の拠点集落の一つとして位置づけられる。前期末～中期初頭の貯蔵穴、中期前半の竪穴住居、中期後半の方形周溝墓が検出され、時代の推移による集落内における貯蔵域、居住域、墓域の変遷が確認されている[12]。また出土土器は前期～中期における西摂地域の基準資料となっている。戎町遺跡も前期～中期に盛行する集落遺跡で、前期の竪穴住居や、水田などが確認され、木製鍬未製品も出土している。また中期の竪穴住居、方形周溝墓群が確認されている[13]。この他中期中葉の土器が大量に出土した東山遺跡[14]、ゴホウラ貝製貝輪40点余が中期後半の壷に納められて出土した河原遺跡[15]などが古くから知られ、大手町遺跡からも遺物が多数検出されている。後期～古墳時代初頭にかけては数多くの遺跡が確認されており、遺跡数は急増する。楠・荒田町、兵庫松本[16]、上沢、三番町、五番町、長田神社境内、長田南[17]、御蔵、戎町、若松町[18]、鷹取町[19]、大手町などの遺跡が挙げられ、兵庫松本、長田神社境内、大手町遺跡などはこの時期に盛行を迎え、竪穴住居や掘立柱建物などの濃密な遺構の分布や遺物の出土が確認されている。大手町遺跡からは龍をモチーフにした絵画土器や、手焙形土器などが出土している[20]。

古墳時代　古墳時代前期に平野部を望む丘陵上に、夢野丸山古墳（円墳、径20m）[21]、会下山二本松古墳（前方後円墳、全長55m）[22]、得能山古墳（円墳）[23]が築造される。中期には旧苅藻川河口付近に念仏山古墳が築かれたとされ、鰭付円筒埴輪が出土しているが、古くに消滅し詳細は不明である[24]。後期には池田古墳群[25]、大手古墳群[26]等が挙げられるが、古くから市街地化が進んだ地域であり現存するものは少なく、詳細は不明である。この他、兵庫区雪御所町から荒田町にかけて横穴式石室を埋葬施設とする古墳群、旧苅藻川河口付近の海岸に近い低地には雀塚、櫟塚、大水の子古墳などの後期古墳、兵庫区氷室町付近や長田区大塚町付近にも古墳群が存在したといわれている[27]。

古墳時代中期以降の集落は、柵に囲まれた「豪族居館」と考えられる６世紀初めの掘立柱建物群が検出された松野遺跡[28]をはじめ、楠・荒田町、湊川[29]、三番町、上沢、神楽、



1．長田神社境内遺跡
2．長田南遺跡
3．五番町遺跡
4．三番町遺跡
5．林山古窯址
6．名倉遺跡
7．室内遺跡
8．上沢遺跡
9．会下山遺跡
10．河原遺跡
11．東山遺跡
12．兵庫松本遺跡
13．楠・荒田町遺跡
14．大開遺跡
15．兵庫津遺跡
16．御蔵遺跡
17．御船遺跡
18．神楽遺跡
19．水笠遺跡
20．大橋町遺跡
21．二葉町遺跡
22．松野遺跡
23．若松町遺跡
24．長田野田遺跡
25．戎町遺跡
26．大田町遺跡
27．鷹取町遺跡
28．権現町遺跡
29．大手町遺跡
A　夢野丸山古墳
B　会下山二本松古墳
C　池田古墳群
D　念仏山古墳
E　得能山古墳
F　大手古墳群

fig.2　周辺の主な遺跡（S=1:25,000）

大田町などの各遺跡で集落跡が確認されている。

松野遺跡の柵に囲まれた掘立柱建物群は、この地域の神奈美である高取山を望む建物群と推定され、モニュメントとの見方もある[30]。この建物群の南側からは、中期末～後期前半の竪穴住居や掘立柱建物群が検出された他、多数の滑石製模造品が出土している。また、三番町遺跡からは竪穴住居、土器溜り、大溝などが検出され、大溝からは中期の土師器類と共に小型仿製鏡が出土した[31]。上沢、神楽の両遺跡では中期～後期の竪穴住居や掘立柱建物が多数検出され、滑石製玉類、韓式系土器が出土している[32]。

長田区林山町では、神戸市内で確認されている数少ない古墳時代の須恵器窯のひとつである林山古窯址が確認されている[33]。発掘調査が実施されていないため詳細は不明であるが、採集された遺物から６世紀後半に操業した窯であると考えられている。

飛鳥時代～平安時代

飛鳥時代～奈良時代には、御蔵遺跡で掘立柱建物など多くの遺構が確認され、奈良三彩の脚付火舎または盤の脚、土馬や銙帯などが出土している[34]。室内遺跡[35]は現在の室内小学校内における瓦類の出土から白鳳期の寺院「房王寺」の推定地と考えられている。平成９年度に兵庫県教育委員会により実施された調査では白鳳期の遺物ではないが、芦屋市芦屋廃寺と同文の奈良時代～平安時代の瓦や塑像の台座が出土しており、寺院の存在が確実視されている。室内遺跡の南側に位置する上沢遺跡では飛鳥時代の掘立柱建物、鞴羽口、鉄滓、銅滓、漆容器、奈良時代～平安時代の掘立柱建物群や銅製巡方、銅製絞具、銭貨や、井戸から銅鋺が出土している[36]。大田町遺跡は古代山陽道の駅家のひとつ「須磨駅家」の可能性が高いことが指摘されている。奈良時代～平安時代の掘立柱建物約30棟、土坑、地鎮遺構、土器埋納遺構などが確認されており、平成３年度の兵庫県教育委員会による調査ではヘラ描文字が施された円面硯が出土した。「荒田郡　中富郷　直□□」と現時点で解読され、文献には現れない「荒田郡」の存在が判明した[37]。この他、二葉町遺跡でも奈良時代の掘立柱建物群が確認されており、公共性の高い性格が指摘されている。古代山陽道が通過していたと推定されることから、交通の要衝であったであろうこの地域には官衙的な性格が強い遺跡が集中している。

中世以降

平安時代末期以降、遺跡の数は急増する。この時期には開発が活発に進行したものと考えられる。楠・荒田町遺跡の神戸大学付属病院敷地内からは大規模な二重の堀、柱穴内に礎盤石を据えた櫓と考えられる掘立柱建物が検出されており[38]、楠・荒田町遺跡の北側に位置し、園池遺構が確認された祇園遺跡[39]と共に平氏の「福原京」に関連するものとして注目されている。平安時代後半～鎌倉時代にかけては、二葉町遺跡から掘立柱建物群や井戸、木棺墓などが検出されている。久保町６丁目地区では、平安時代後半の鋤溝群を切って平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物群が建てられている状況が確認されたことから、耕作地から集落域への変遷が確認できるデータとなった。井戸には板材や曲物を使用した多様な形態が存在するが、複材準構造船の胴部を井戸枠に転用した井戸が確認されている[40]。また、木棺墓の１基からは烏帽子が出土しており、身分の高い人物の埋葬が推定されている。また、律令期以降近世にかけて、瀬戸内海航路の基幹港のひとつとして港湾都市を形成した兵庫津遺跡では、奈良時代～近世に至る数多くの遺構、遺物が確認され、その様相が次第に明らかになりつつある[41]。

(3) 長田神社境内遺跡の概要

長田神社境内遺跡は大正15年の長田神社社殿再建工事に伴う発見以後、長らく調査が行なわれる機会はなかった。昭和60年度と翌昭和61年度に市街地再開発事業に伴い試掘調査を実施した結果、埋蔵文化財が確認された。この結果を受けて昭和61年度から昭和62年度にかけて、発掘調査が実施され、縄文時代晩期～近世にかけての遺構、遺物が確認された(第１次調査)。以来、17次にわたる調査が実施されている

縄文時代以前　後世の遺構埋土中からであるが、旧石器時代の尖頭器が第14次調査で出土している。

縄文時代の遺構、遺物は、第１次調査において晩期以前に遡ると考えられる遺物が出土している他、晩期後半の土坑が検出され、滋賀里Ⅳ式の深鉢、船橋式期の突帯文土器などが出土している。この他、第14次調査では異形石器が出土している。

弥生時代　弥生時代前期～中期の状況は明らかではない。後期から遺構、遺物が確認される。第１、３、５、10、12、13次調査で弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居、掘立柱建物、溝、土坑などが検出されている。また苅藻川旧流路と推定される流路も確認されている。第１次調査では後期後葉の六角形竪穴住居が検出された。現在の長田神社東側の苅藻川旧流路に面した緩斜面地上に集落が形成されているものと推定される。第10次調査では竪穴住居の最終埋土から小型仿製鏡が出土している。弥生時代後期～古墳時代初頭にかけては、長田神社境内遺跡における第１の盛行期といえる。

古墳時代　第５次調査で前期と後期の竪穴住居が確認されている。第７次調査において前期の掘立柱建物、流路、第14次調査で前期の落ち込みが検出され、多量の遺物が出土した。集落域はほぼ前段階の弥生時代後期～古墳時代初頭と重なる範囲と考えられるが、遺構数は減少する。第５次調査で中期、第14次調査において後期の掘立柱建物が検出されている以外は、第２、６次調査などで溝や流路が確認されているのみで、これまで集落の中心域であった現在の長田神社東側は、中期以降の状況はやや希薄となり、新たに長田神社北西部に遺構の分布が認められる。

飛鳥時代～平安時代　飛鳥時代の遺構は第14次調査でピットが確認されている。奈良時代については、遺構、遺物の存在は現在までに確認されていない。

平安時代の遺構は、第１次調査で平安時代後期（12世紀前半）の木棺直葬墓１基が検出されている以外には、これまでに顕著な遺構は確認されておらず、古墳時代中期以降平安時代に至るまで、遺構、遺物の分布は非常に希薄であると言わざるを得ない。

鎌倉時代以降　鎌倉時代以降、再び遺構、遺物が確認されるようになるが、建物跡などを伴う顕著な集落域は確認されていない。第１次調査において鎌倉時代～室町時代の井戸、土坑、礫を伴う落ち込みが検出され、第３次調査で鎌倉時代以降の掘立柱建物１棟、第５次調査では水田、第７次調査で鎌倉時代～室町時代の溝、土坑、礫を伴う落ち込みが検出された。また、第８次調査では同時期の井戸、人頭大の石材を伴う落ち込みが検出されているなど、井戸や、礫、石を伴う土坑、落ち込みの存在が特徴的である。第７次調査では江戸時代の長田神社の神官屋敷に関連するものと推定される遺構が確認されている。屋敷地の区画は、前段階である15世紀後半～16世紀の堀と考えられる、方形区画溝の区画をほぼ踏襲している点が注目される。

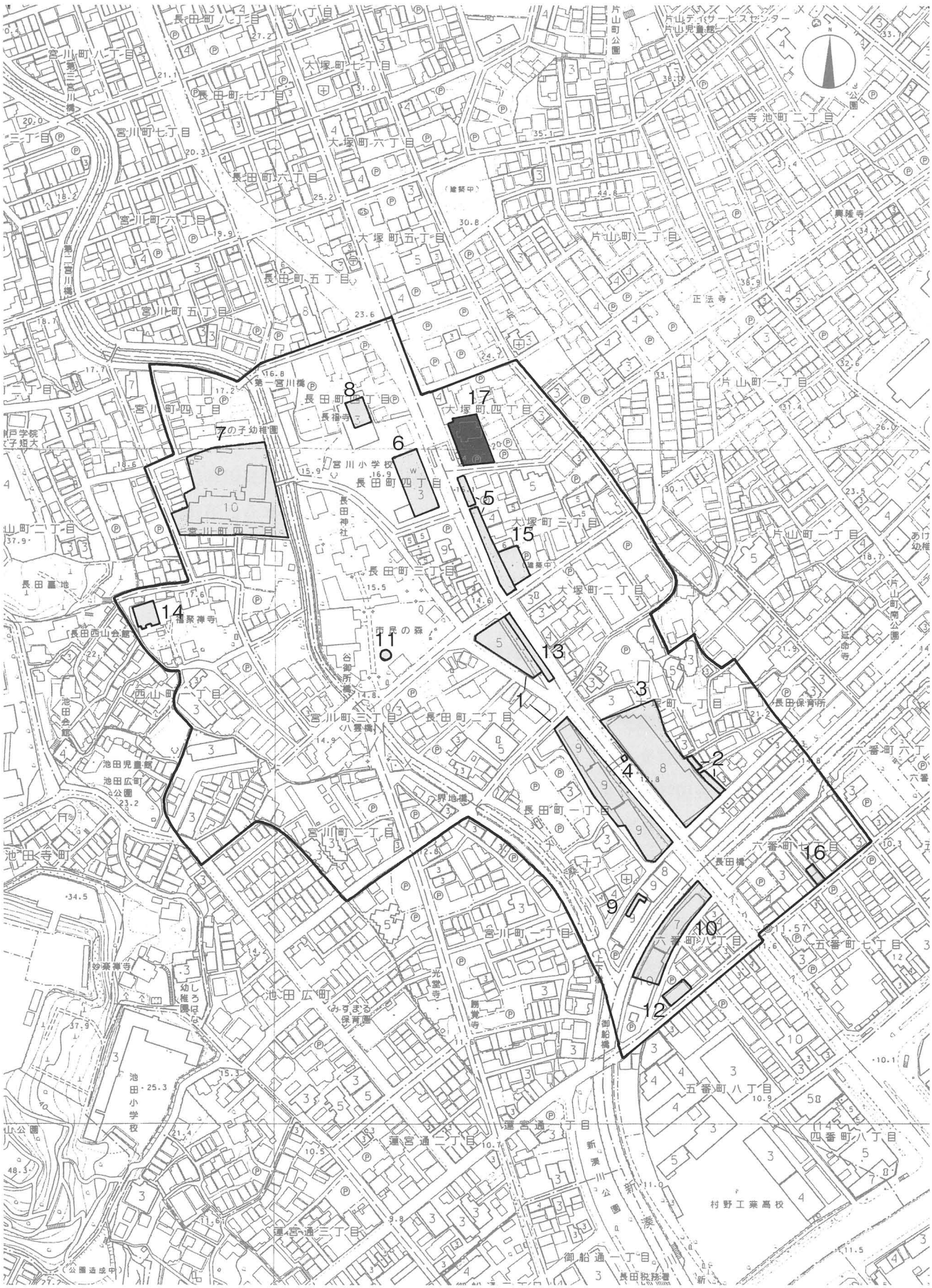


fig.3　長田神社境内遺跡調査位置図（S=1：4,000）

次数	調　査　主　体	面積㎡	開始日	終了日	主　な　内　容
1	神戸市教育委員会・神戸市スポーツ教育公社	2050	1987/02/02	1987/10/31	縄文時代晩期の土坑,弥生時代後期～古墳時代初頭の集落・墓・土器群,平安時代の墓,中世の井戸
2	神戸市教育委員会	110	1988/09/30	1988/11/02	縄文時代の遺物包含層，古墳時代の溝・ピット
3	神戸市教育委員会	2700	1989/03/27	1990/02/10	弥生時代後期竪穴住居，鎌倉時代以降の掘立柱建物
4	神戸市教育委員会	12	1990/01/17	1990/01/23	弥生時代後期流路
5	神戸市スポーツ教育公社	506	1991/08/30	1992/01/17	弥生時代後期～古墳時代初頭・前期の竪穴住居，古墳時代中期の掘立柱建物
6	神戸市教育委員会	950	1996/04/11	1996/08/23	古墳時代中期後半の自然河道，鎌倉時代～室町時代井戸，中世の掘立柱建物
7	神戸市教育委員会	1550	1996/06/17	1997/02/28	弥生時代～近世掘立柱建物，中世の方形区画溝
8	神戸市教育委員会	267	1996/10/02	1996/10/31	中世の池？水溜・土坑・溝
9	神戸市教育委員会	100	1997/01/27	1997/02/03	縄文時代・弥生時代～古墳時代・中世の遺物包含層
10	神戸市教育委員会	1100	1997/06/16	1997/09/16	弥生時代後期の竪穴住居・掘立柱建物・小型仿製鏡，中世の掘立柱建物
11	神戸市教育委員会	30	1998/02/19	1998/03/06	古墳時代の須恵器・土師器，近世の石組遺構
12	神戸市教育委員会	140	1998/08/26	1998/09/18	弥生時代末の竪穴住居・ピット，中世の落ち込み
13	神戸市教育委員会	116	1999/10/29	1999/11/12	弥生時代後期の溝，弥生時代末の竪穴住居，近世以降の溝
14	神戸市教育委員会	320	2001/01/18	2001/03/22	旧石器時代の尖頭器,縄文時代の異形石器,古墳時代の溝・落ち込み,中世の掘立柱建物,溝,土坑
15	神戸市教育委員会	73	2002/06/26	2002/07/12	弥生時代後半の流路，埋没過程での古墳時代前期の土器群を確認
16	神戸市教育委員会	75	2007/11/29	2007/12/11	弥生時代末～古墳時代初頭のピット・溝

註
文献は下記のとおり
第１次　黒田恭正編『長田神社境内遺跡発掘調査概報』1990
第２次　神戸市教育委員会編『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』1994
第３・４次　神戸市教育委員会編『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』1992
第５次　神戸市教育委員会編『平成３年度神戸市埋蔵文化財年報』1994
第６～９次　神戸市教育委員会編『平成８年度神戸市埋蔵文化財年報』1999
第10・11次　神戸市教育委員会編『平成９年度神戸市埋蔵文化財年報』2000
第12次　神戸市教育委員会編『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』2001
第13次　神戸市教育委員会編『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』2002
第14次　神戸市教育委員会編『平成12年度神戸市埋蔵文化財年報』2003
第15次　神戸市教育委員会編『平成14年度神戸市埋蔵文化財年報』2005
第16次　富山直人『長田神社境内遺跡16次発掘調査実績報告』2007

表１　長田神社境内遺跡調査次数表

第２節　調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

今回の調査地は、神戸市埋蔵文化財地図に記載されている長田神社境内遺跡の範囲内に所在する。共同住宅建設計画に伴い試掘調査を行なった結果、埋蔵文化財の存在が確認された。この結果を受けて事業主である株式会社イー・グループと協議を行ない、建設工事により埋蔵文化財が影響を受ける範囲（約275㎡）について発掘調査を実施した。

(2) 調査組織

平成19～20年度

神戸市文化財保護審議会　　史跡・考古資料担当

檀上　重光　　前神戸女子短期大学教授（～平成19年７月14日）

工樂　善通　　大阪府立狭山池博物館長

和田　晴吾　　立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長　　小川　雄三（平成19年度）・橋口　秀志（平成20年度）

社会教育部長　　黒住　章久

教育委員会参事　　柏木　一孝

（文化財課長事務取扱）

社会教育部主幹　　丸山　　潔

（埋蔵文化財指導係長事務取扱）

社会教育部主幹　　渡辺　伸行

（埋蔵文化財センター所長事務取扱）

埋蔵文化財調査係長　　千種　　浩

文化財課主査　　丹治　康明

同　　安田　　滋

同　　山本　雅和（平成19年度）

事務担当学芸員　　阿部　敬生

中谷　　正

調査担当学芸員　　阿部　　功

保存科学担当学芸員　　中村　大介

遺物整理担当学芸員　　黒田　恭正（平成20年度）

佐伯　二郎（平成20年度）

(3) 調査の経過

平成20年１月９日より、重機掘削を開始する。重機掘削と並行して遺物包含層の掘削、遺構面の検出、精査を行なう。調査区の南側には自然河道が存在し、西側半分は谷状に落ち込むことを確認する。１月15日に事務所の仮設電気引き込み工事完了。１月17日に仮設水道工事完了。重機を小型のバックホーに入れ替え、進入の通路として残していた部分を掘削開始。並行して河道、谷の落ち込み状況の確認、遺構検出を続行。１月21日から遺構

掘削を開始する。杭打割付。１月22日平面図実測開始。遺構断面写真撮影、断面図実測も合わせて開始する。東半部SK06から多くの遺物を検出。祭祀に関連する遺構か。１月24日谷状落ち込み掘削開始。１月28日谷状落ち込みの最下層は２条の谷となることが判明、引続き掘下げを続行。１月30日谷２で中世の遺物が集中して出土。１月31日谷状落ち込み畔及び谷１・２の畔の断面写真撮影、断面図を実測。畔の取り外しを開始、西半部平面図実測を開始する。２月５日全景写真撮影、谷１・２内遺物出土状況写真撮影。２月６日全景写真撮影を続行、SK06写真撮影、遺物取り上げ。２月７日各遺構遺物出土状況写真撮影。ピット半裁、断面写真撮影、断面図実測を行ない完掘へ。８日記録作業を継続。２月13日重機を入れ替え、西側から埋戻しを開始する。東壁断面実測。２月14日埋戻し作業続行、仮設電気、水道撤去。２月15日機材片付け、搬出。現地における調査を完了する。

fig.4
調査風景（写真）

註

1）喜谷美宣「旧石器・縄文時代」『新修神戸市史』歴史編Ⅰ　自然・考古　神戸市　1989
2）中谷　正・山本雅和・須藤　宏『大手町遺跡第１～４・６次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2003
3）直良信夫「神戸市名倉町出土の縄文土器片」『近畿古文化叢考』葦牙書房　1943
4）丸山　潔「楠・荒田町遺跡」『昭和61年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1989
　黒田恭正・阿部敬正「楠・荒田町遺跡　第11次調査」『平成４年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1995
5）阿部敬正編『上沢遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会　1995
6）口野博史・水嶋正稔「三番町遺跡　第２次調査」『昭和63年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1994
7）丸山　潔「五番町遺跡出土の土器」『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会　1980
　川上厚志「五番町遺跡　第７次調査」『平成12年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2003　など
8）山口英正「御蔵遺跡　第３次調査」『平成９年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2000
9）口野博史・井尻　格「戎町遺跡（第６次）」『平成２年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1993
　口野博史「戎町遺跡　第14次調査」『平成７年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1998
10）前田佳久編『大開遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会　1993
11）ａ川上厚志編『二葉町遺跡発掘調査報告書　第３・５・６・７・８・９・12次調査』神戸市教育委員会　2001
　ｂ東喜代秀編『二葉町遺跡発掘調査報告書　第14～21次調査』神戸市教育委員会　2008
12）丸山　潔・丹治康明編『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会　1980
13）藤井太郎編『戎町遺跡第35・38・50・56次・松野遺跡第32・33・38次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2005
14）小林行雄「神戸市東山遺跡弥生式土器研究」『考古学』４－４　東京考古学会　1933

15）濱田耕作「貝輪を容れた素焼壺」『人類学雑誌』36-8合併号　東京人類学会　1933
前掲14）
16）中谷　正編『兵庫松本遺跡　第２～４・12・17・19次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2005
17）池田　毅「長田南遺跡　第１次調査」『平成10年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2001
18）口野博史「若松町遺跡　第２次調査」『平成10年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2001
19）大平　茂編『神戸市鷹取町遺跡』兵庫県教育委員会　1991
20）前掲２）
21）梅原末治「神戸市夢野丸山古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第二輯　兵庫県　1925
22）吉井太郎他「会下山二本松古墳及び経塚」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第五輯　兵庫県　1923
黒田恭正「会下山二本松古墳」『昭和59年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1987
23）梅原末治「神戸市板宿得能山古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第二輯　兵庫県　1925
24）喜谷美宣「市街地に消えた古墳－念仏山古墳－」『神戸市立博物館研究紀要』第６号　神戸市立博物館　1989
25）野々内古墳では６世紀後半代の遺物が採集され、観音山古墳は昭和25年（1950）頃公園造成により消滅したが、工事中に横穴式石室が現れ、６世紀末葉の遺物が出土している。
森田　稔「長田区観音山古墳の出土遺物」『神戸市立博物館だより』№23　神戸市立博物館　1988
26）横穴式石室を埋葬施設とする古墳１基が確認されている。前掲２）
27）喜谷美宣「古墳時代」『新修神戸市史』歴史編－　自然・考古　神戸市　1989
28）千種　浩編『松野遺跡発掘調査概要』神戸市教育委員会　1983
29）西岡巧次「湊川遺跡」『昭和61年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1989
30）口野博史「松野遺跡の性格とマツリ」『松野遺跡発掘調査報告書　第３～７次調査』神戸市教育委員会　2001
高取山はかつて神撫山と呼ばれていた。
問屋真一「神撫山か高取山か・・・・・・・・・」『神戸市立博物館だより』№35　神戸市立博物館　1991
31）山仲　進編『三番町遺跡　第１次調査（1987・1988年度）』妙見山麓遺跡調査会　2006
32）池田　毅・井尻　格「上沢遺跡　第９次調査」『平成９年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2000など
渡辺伸行・西岡誠司「神楽遺跡」『昭和59年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1987
33）稲沢正行・渡辺伸行「神戸市長田区林山窯について」『神戸古代史』３－１　神戸古代史研究会　1986
34）山田清朝・山上雅弘編『御蔵遺跡－第８・９・10次調査－』神戸市教育委員会　2000
安田　滋・富山直人・石島三和編『御蔵遺跡第４・６・14・32次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2001
安田　滋・池田　毅・阿部　功・中居さやか『御蔵遺跡第17・38次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2001
谷　正俊編『御蔵遺跡Ⅴ　第26・37・45・51次調査』神戸市教育委員会　2003
富山直人・川上厚志編『御蔵遺跡第５・７・11～13・18～22・24・28・29・31・33～36・39・41・43次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2003
35）水口富夫・平田博幸・高瀬一嘉「室内遺跡」『平成９年度　年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　1998
36）斎木　巌「上沢遺跡　第４次調査」『平成８年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1999
橋詰清孝・石島三和・中谷　正「上沢遺跡　第32次－１・２調査」『平成11年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2002
口野博史・関野　豊「上沢遺跡　第33次調査」『平成11年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2002など
37）森内秀造編『神戸市須磨区　大田町遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会　1993
38）岡田章一・久保弘幸・深江英憲『楠・荒田町遺跡－神戸大学付属病院構内遺跡－』兵庫県教育委員会　1997
別府洋二編『楠・荒田町遺跡Ⅲ』兵庫県教育委員会　2008
39）須藤　宏「祇園遺跡　第２次調査」『平成６年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1997
富山直人『祇園遺跡　第５次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2000
40）前掲11）ａ
41）兵庫津遺跡では、近年考古学、文献史、歴史地理学、絵画研究などの多方面から総合的な研究が進展しつつある。
内藤俊哉「兵庫津遺跡　第15次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2001
黒田恭正「兵庫津遺跡　第20次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2002
岡田章一・菱田準子・深江英憲編『兵庫津遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会　2004
神戸市立博物館編『特別展　よみがえる兵庫津－港湾都市の命脈をたどる』神戸市立博物館　2004
藤本史子編『兵庫津遺跡－御崎本町地点発掘調査報告書－』大手前大学史学研究所　2006
藤本史子・中井淳史編『兵庫津の総合的研究－兵庫津研究の最新成果－』大手前大学史学研究所　2008
阿部　功編『兵庫津遺跡第42次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2008など

第２章　調査の成果

第１節　基本層序

今回の調査地は、従前建物の基礎掘削などに伴う撹乱の影響は少なく、比較的良好な状態で土層の状況を確認することができた。尚、調査地は西側に市道長田線を隔てて、平成８年度に実施された第６次調査地と近接する。

調査地付近の地形

調査地の現況は、調査地付近の地形は基本的に北から南へと下がる斜面地である。北半部は住宅地としての造成に伴い、南半部に比べて１ｍ以上の高度差があり、一段高い状況であった。試掘調査の結果、北半部に埋蔵文化財の存在は確認されていない。調査地の東側は、北から南へと派生する丘陵へ向かって高くなっており、この丘陵斜面は住宅地として造成がなされている。調査地西側は現状では、緩やかに北へと上がる緩斜面地となっている。調査地付近は古くから市街地化が進行したため、現状では細かな地形観察を行なうことは困難なものとなっている。しかし、開発の進行により失われた旧地形は、明治19年（1886）測量の『仮製地形図』などの観察から、ある程度復元することが可能である。

『仮製地形図』の観察から調査地付近は、六甲山系から流出する苅藻川が形成した開析谷の中に位置していることが確認できる。調査地付近の地形を概観すると、六甲山系から派生した一丘陵が、現在の長田区大丸町付近をピークとして、南へと延びている。この丘陵の東西両斜面には、小さな谷が複数形成されており、この谷を利用したため池が複数造成されている。丘陵の西側斜面については、標高40ｍ前後以下が水田として利用されている状況が地形図から読み取れる。また、この水田は蛇行する苅藻川の流路に沿って、谷の両岸に展開している状況が確認できる。調査地は東側の丘陵が苅藻川へと下がる傾斜変換点付近に立地している。

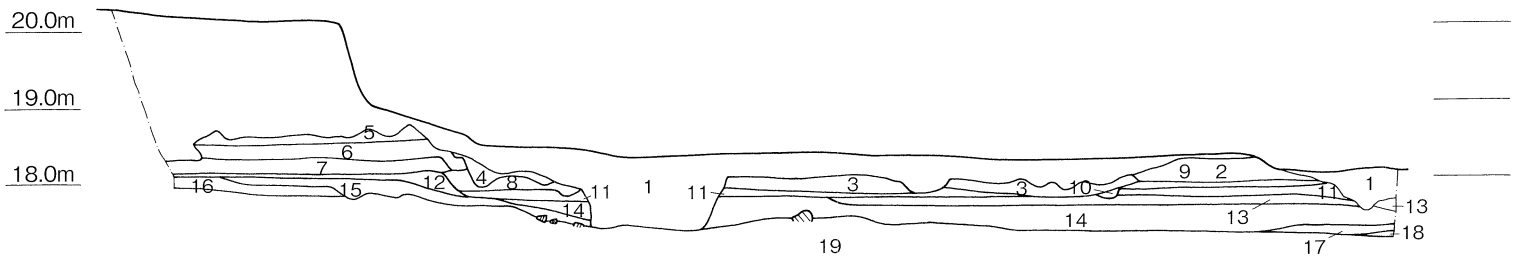
基本土層

調査地付近は、近代まで水田等の耕作地として利用されていた状況が調査地の土層観察からも確認でき、盛土の下層には数枚の旧耕土、床土が確認された。尚、調査地南西角ではこれら旧耕土層は確認されず、盛土の下層は北西から南東へと流れる自然流路による堆積となっている。調査区南半部の旧耕土層の下層に、古墳時代から中世の遺物包含層である茶褐灰色シルトおよび褐灰色シルトが検出された。しかし調査区北半部では旧耕土層下に遺物包含層は検出されず、地山層である淡黄褐色シルトが検出されたことから、耕作地の造成に伴い削平された可能性が考えられる。この淡黄褐色シルトは北へ向かうと共に高度を増し、斜面となって北側の丘陵部へと続くものと推定される。また、調査区の西半は谷状地形となって大きく落ち込む状況が確認された。この谷の西側の肩は調査区の西壁沿いに検出されている。また、この谷の最深部は２条の谷となって深く落ち込んでいる。この谷状地形の埋土中からは古墳時代の遺物が中世の遺物と共に比較的まとまって出土した。

この谷は調査区南西側で、前述した東西方向の自然流路により切られている。自然流路は断割調査により深度を追跡したが、調査区の西側へと谷状に深く落ち込んでおり、西側の調査区外へと続いていたため最深部を確認することはできなかった。

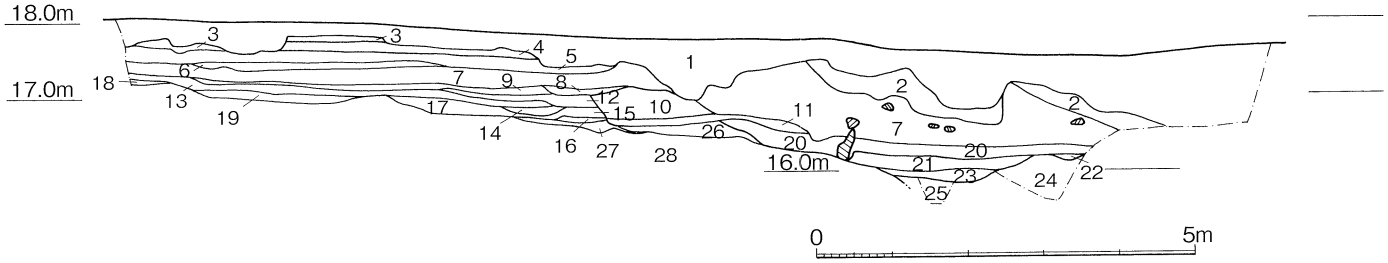
一方、南半部の東側は、東から西の谷状地形へと向かって緩やかに下がる斜面となっており、この範囲からは多数の遺構が検出された。

東壁



1．盛土・撹乱
2．灰色シルト質細砂(旧耕土)
3．暗褐色シルト質細砂(旧耕土)
4．褐灰色砂質シルト
5．灰色シルト質細砂(旧耕土)
6．黄褐色シルト質細砂(旧耕土)
7．灰褐色シルト質細砂(旧耕土)
8．灰色砂質シルト(旧耕土)
9．茶褐色シルト質細砂(旧耕土)
10．灰色シルト質細砂
11．黄褐色砂質シルト
12．灰黄褐色シルト質細砂
13．灰褐色砂質シルト
14．灰褐色シルト質細砂
15．褐灰色砂質シルト
16．灰褐色混礫砂質シルト
17．茶褐灰色シルト
18．茶褐灰色シルト(遺物包含層)
19．淡黄褐色シルト

南壁



1．盛土・撹乱
2．暗灰黄色砂質シルト
3．黄褐色粘質土
4．灰褐色砂質シルト
5．淡褐灰色砂質シルト
6．灰褐色砂質シルト
7．淡褐灰色砂質シルト
8．灰褐色シルト
9．灰褐色シルト
10．茶灰色シルト
11．灰色砂質シルト
12．暗灰褐色シルト
13．茶褐灰色シルト
14．暗茶褐色シルト
15．褐灰色混礫シルト
16．暗灰色シルト
17．褐灰色シルト(遺物包含層)
18．茶褐灰色シルト(遺物包含層)
19．暗褐灰色シルト(SX01)
20．淡灰褐色シルト
21．暗灰色粘質土
22．暗灰色粘質土
23．暗青灰色粘質土
24．黄褐色混礫粗砂
25．灰褐色混礫粗砂
26．灰色混礫シルト
27．灰色シルト
28．淡黄褐色シルト

fig.5　調査区東・南壁断面図

第２節　古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では主として、古墳時代前期と中世の二時期の遺構が同一面から検出された。また、調査区の西半部において検出された、谷状地形内からも多くの遺物が出土した。ここでは、調査の成果から古墳時代と中世の遺構、遺物と谷状遺構からの出土遺物に分けて述べていきたい。

古墳時代の遺構については、調査区東半部から土坑１基、また、谷内のテラスから検出した土坑１基の計２基の土坑と、調査区東半部から落ち込み１ヶ所を検出した。

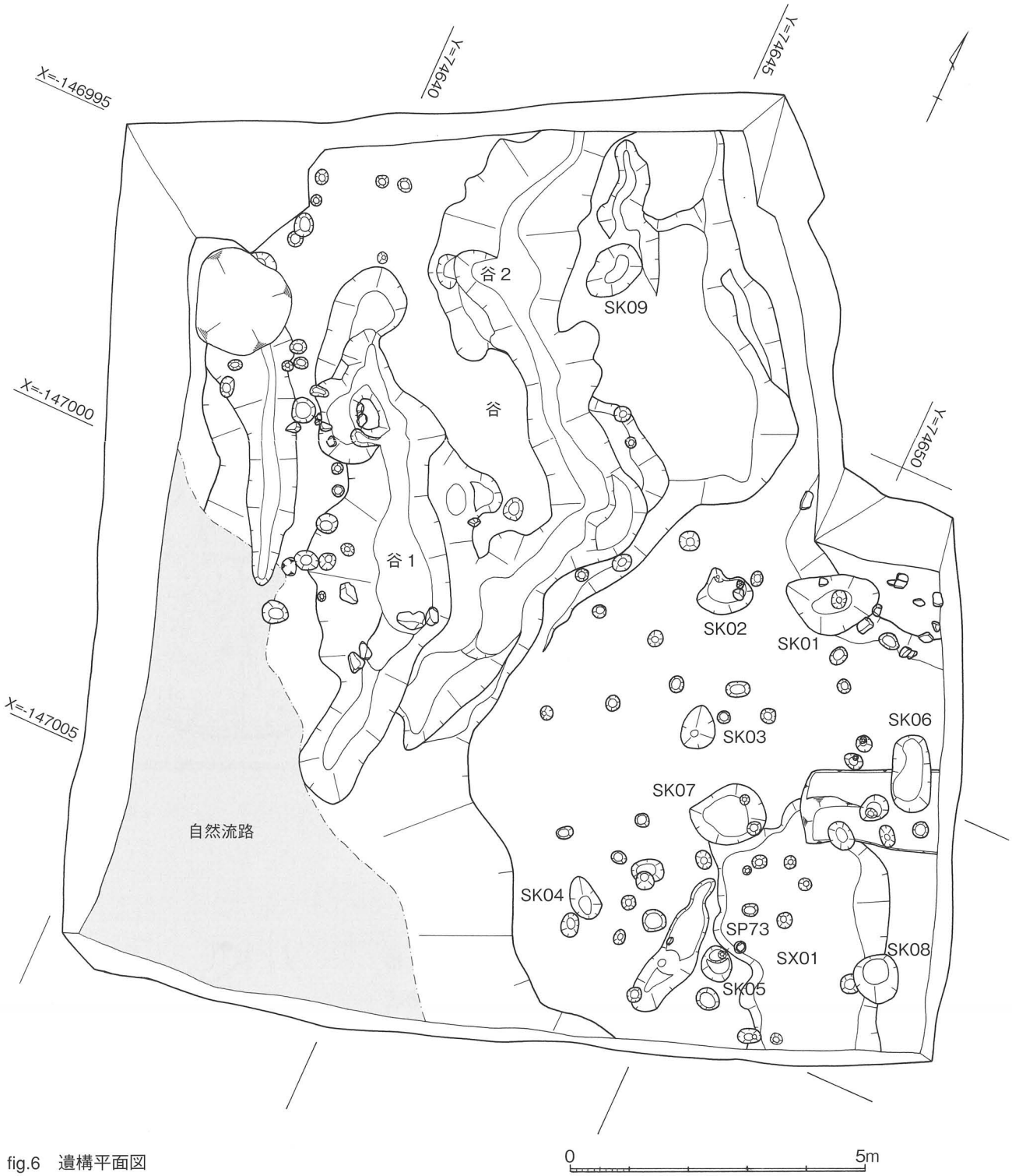


fig.6　遺構平面図

SK03　東半部で検出した長径0.73m、短径0.58m、検出面からの深さ0.17mの土坑で、土師器細片が出土した。

SK09　調査区西半部の谷状地形内のテラス状になった部分から検出された土坑である。長径1.05m、短径0.78m、検出面からの深さ0.2mである。

埋土内からは土師器が出土した。

１は鉢で口縁端部をやや外方につまみ上げている。２は甕である。球形の体部で、強く屈曲する頸部からやや内湾気味に立ち上がる口縁部を持ち、端部はやや上下に肥厚させる。外面はハケメ調整で、体部内面にはヘラケズリが施される。内面の底部には指頭圧痕が残る。

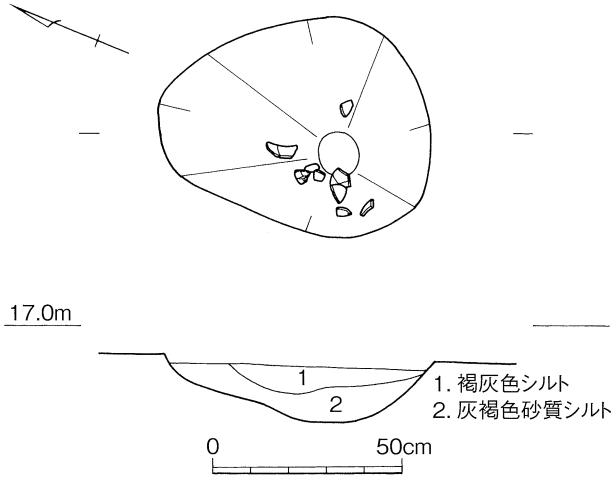


fig.7　SK03平面・断面図

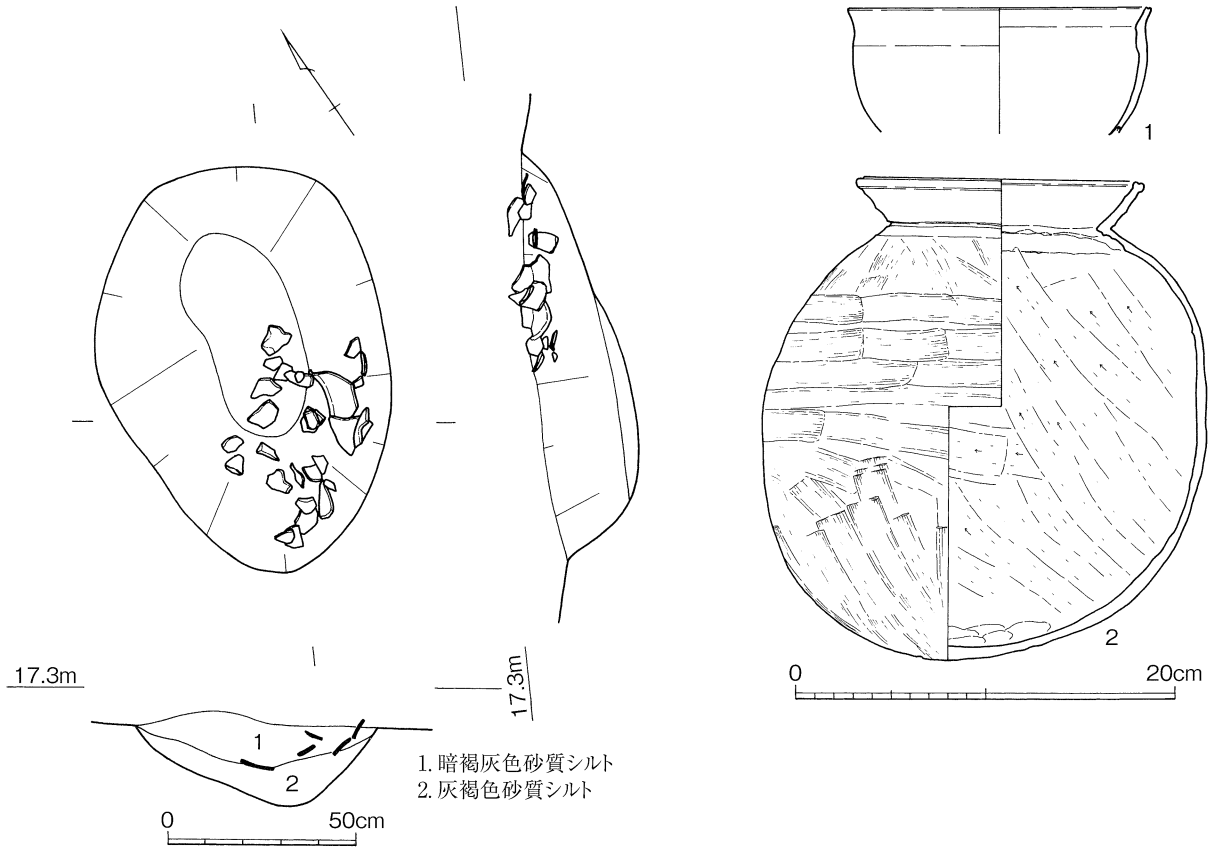


fig.8　SK09平面・断面・立面図・出土遺物

SX01　調査区の南東角付近で検出した、不定形な落ち込み状遺構である。東西幅2.1m～2.9m、南北4.3m以上で、南側は調査区外へと続く。検出面からの深さ0.14mである。土師器が出土している。

３、４は高坏の脚部である。４は内面にヘラケズリを施す、５、６は鉢の底部と考えられる。

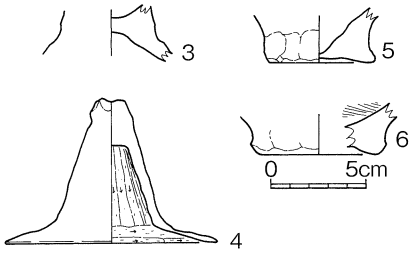


fig. 9　SX01出土遺物

第３節　中世の遺構と遺物

中世の遺構は主に、調査区の東半部を中心に検出された。

SK06

東半部中央の東壁付近で検出された土坑である。長さ1.34m、幅0.72mで、検出面からの深さは0.12mである。掘形内から多くの遺物が出土した。

埋土は２層に分かれ、上層は褐灰色シルトで、下層は地山層である淡黄褐色シルトを含んだ褐灰色シルトである。遺物の出土は上層の褐灰色シルトに限られていることから、掘形を掘削後、ある程度内部を均して遺物を据えたことが考えられる。

掘形内には0.1m前後の石２点、および0.2m前後の石１点が置かれており、遺物はこの周囲を中心に検出された。出土した遺物は土師器皿が18点以上、須恵器椀６点、瓦器皿４点、瓦器椀２点である。出土した遺物の皿には口縁を上に向けたものと、下に向けたものの二者が存在し、椀は須恵器椀１点が底部を上に向けていた以外は、口縁部を上にしていた。南側の石付近で検出された椀の内、石の西側のものは出土状況から複数（２点程か）が重ねられた状況であったものと推定され、破片の分布状況と、接合状況から、それ程高くない高度から重ねた椀を石の上へ落下して破砕している可能性がある。この点から、底部を上にした破片は、落下した際に破片が跳ね返った可能性も考えられる。土師器、瓦器の皿の上に瓦器、須恵器椀片が重なっている状況が確認できることから、皿を並べた後に椀を破砕したものとみられ、この状況からSK06は祭祀に関連するものと考えられる。

出土遺物

土師器

出土した土師器皿（fig.11-７～24）は大半が小皿で、24のみが大皿である。小皿の口径は7.8cm～9.6cmであるが、口径9.0cm前後のものが多い。体部外面に一段のヨコナデを施し、10、18～20、22、23の体部下半から底部には指頭圧痕が観察できる。

24は口径13.8cmに復元され、器高は3.3cmである。底部からほぼ直線的に外方へと立ち上がる体部で、口縁部はやや内湾している。体部外面下半に指頭圧痕が顕著に認められる。体部外面上半から口縁部には一段のヨコナデを施している。内面と外面の底部にわずかに煤が付着する。

これらの土師器皿は体部外面の一段ナデから平安京出土土器編年[1]におけるⅤ～Ⅵ期のものに類似する。

瓦　器

25～30は瓦器で、25～28が皿、29、30は椀である。

皿は口径が8.2cm～8.6cmである。

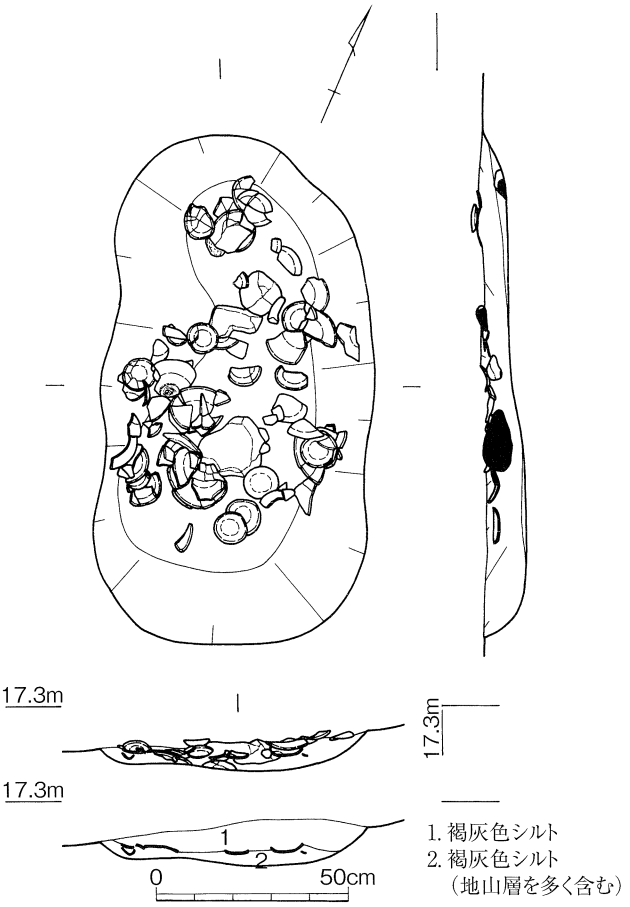


fig.10　SK06平面・断面・立面図

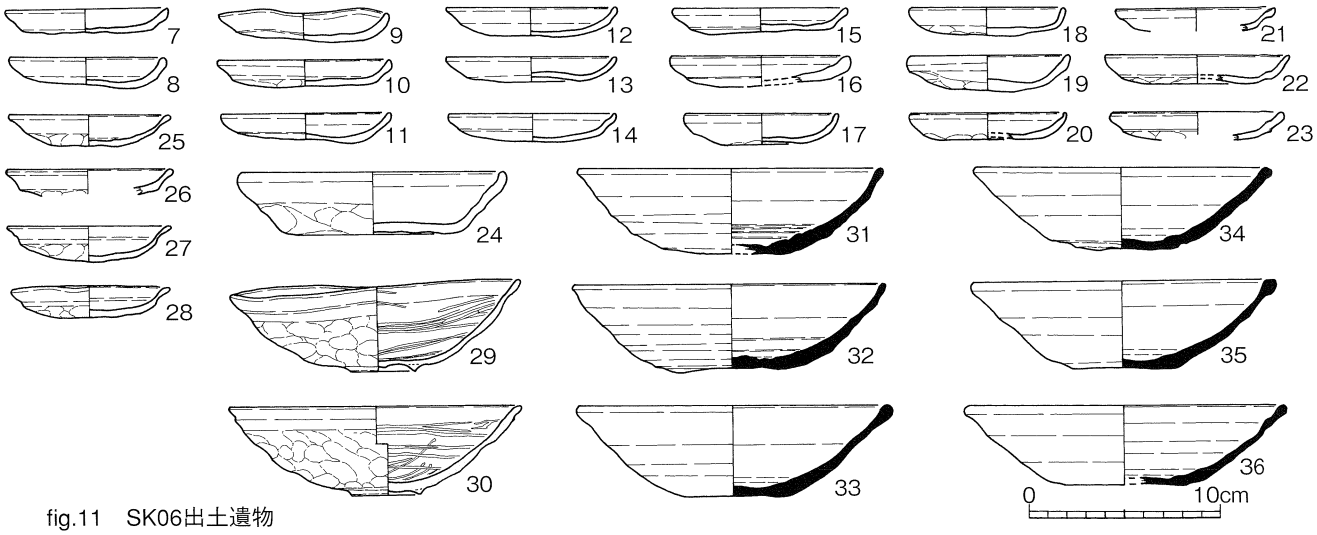


fig.11　SK06出土遺物

体部外面下部には、指頭圧痕が顕著に認められる。口縁部下の外面にヨコナデを強く施し、口縁部はやや外反する。29、30の埦の口径は共に15.2cmであるが、30は大きく歪む。断面三角形の貼り付け高台の底部から、わずかに内湾する体部が立ち上がる。体部外面には指頭圧痕が顕著に認められ、口縁部下の外面には二段のヨコナデを施す。口縁部はやや外反し、端部は丸く収める。内面には疎らな圏線状のヘラミガキを施し、内面底部には平行線状の暗文が施される。これらの瓦器は埦の外面口縁部下の強い二段のヨコナデの特徴から、和泉型瓦器埦の編年Ⅲ期に比定されるものと考えられる[2)]。

須恵器　31～36は須恵器埦である。口径は15.4cm～16.3cmで、回転糸切りの底部から、やや内湾気味に体部が立ち上がる。口縁端部は丸く収める。内面見込み部の凹みは小さい。34、35の外面底部は平高台がわずかに認められる。これらの特徴から、森田　稔氏の編年第Ⅱ期（12世紀後半）の時期が考えられる[3)]。

これらの出土遺物からSK06は、12世紀後半でも新しい時期が考えられる。

土　坑　この他、SK01から土師器、須恵器、SK08から土師器、須恵器、瓦器が出土したが、いずれも微細な細片で時期の特定は困難である。わずかに確認できる遺物から、ほぼSK06と同様の時期であると考えられる。

SP73　東半部南半で検出したピットで、直径0.22m、検出面からの深さは0.33mである。

出土遺物のfig.12-37の須恵器埦は破片からの復元である。口径は18.5cmに復元される。ほぼ直線的に立ち上がる体部で、口縁端部は丸く収める。38のガラス玉は、直径4.13mm、高さ4.83mm、孔径2.07mm、重量0.07ｇ～の淡青色半透明で、約半分を欠損する。内包する気泡はばらつきがあるが、比較的小径のものが多い。孔断面は真円で、孔内面は平滑だが、やや凹凸が見られる。これらの特徴から、引き伸ばし法により作製されたものと考えられる。

37は12世紀代の須恵器埦と考えられ、SP73は中世の遺構であり、ガラス玉は混入したものと推定される。

ピット　70基余のピットを検出したが、いずれも建物等を構成するものであるかは、特定することはできなかった。一部のピットから中世の遺物が出土した。

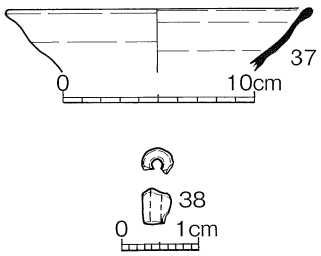


fig.12　SP73出土遺物

第４節　谷状地形

調査区の西半部では北から南へと広がる、谷状地形を検出した。この谷の埋土中からは、比較的まとまった量の遺物が出土した他、谷の最深部内からは祭祀に関連するものと考えられる、遺物集中地点２ヶ所が確認された。

谷状地形　谷は東側から緩やかに下がり、検出面から約0.2m前後の深さでテラス状になった後、検出面からの深さ1.0m前後の谷１と、同じく深さ0.35m～0.85mの谷２の２つの谷が深く下がる。西側は緩やかに上がる。南に比べて、北へ向かうに連れて深さを増す。南側は自然河道により切られている。

谷　1　谷内の西側に位置する。幅は1.0m前後から最大で2.6mである。検出面からの深さは北側で0.46m、中央部で1.0m、南側では1.0mである。埋土には中世の遺物に混じり、古墳時代前期の遺物が比較的まとまって出土した他、古墳時代後期の遺物も出土した。

出土遺物　fig.14-52の須恵器坏身以外はすべて土師器である。

土師器　39～42、46は高坏である。39は坏部で、体部内底面は平坦である。わずかに外反気味に体部が立ち上がる。口縁部はやや外反し、端部は丸く収める。40は脚柱部で中空である。内面はヘラケズリ、外面はヘラミガキを施している。41は脚台部で、脚裾部は大きく広がる。脚柱部と脚裾部との境界は明確である。脚柱部の外面はヘラミガキ、内面は指頭圧痕が確認できる。脚裾部外面はハケメ調整、内面はヘラミガキを施している。42の坏部は内湾気味に立ち上がる体部からわずかに屈曲して口縁部へと外反する。口縁端部はややつまみ上げたような形状である。脚台部は、脚裾部が大きく広がる。全体的に摩滅しており、脚柱部外面にわずかにヘラミガキが認められるのみである。

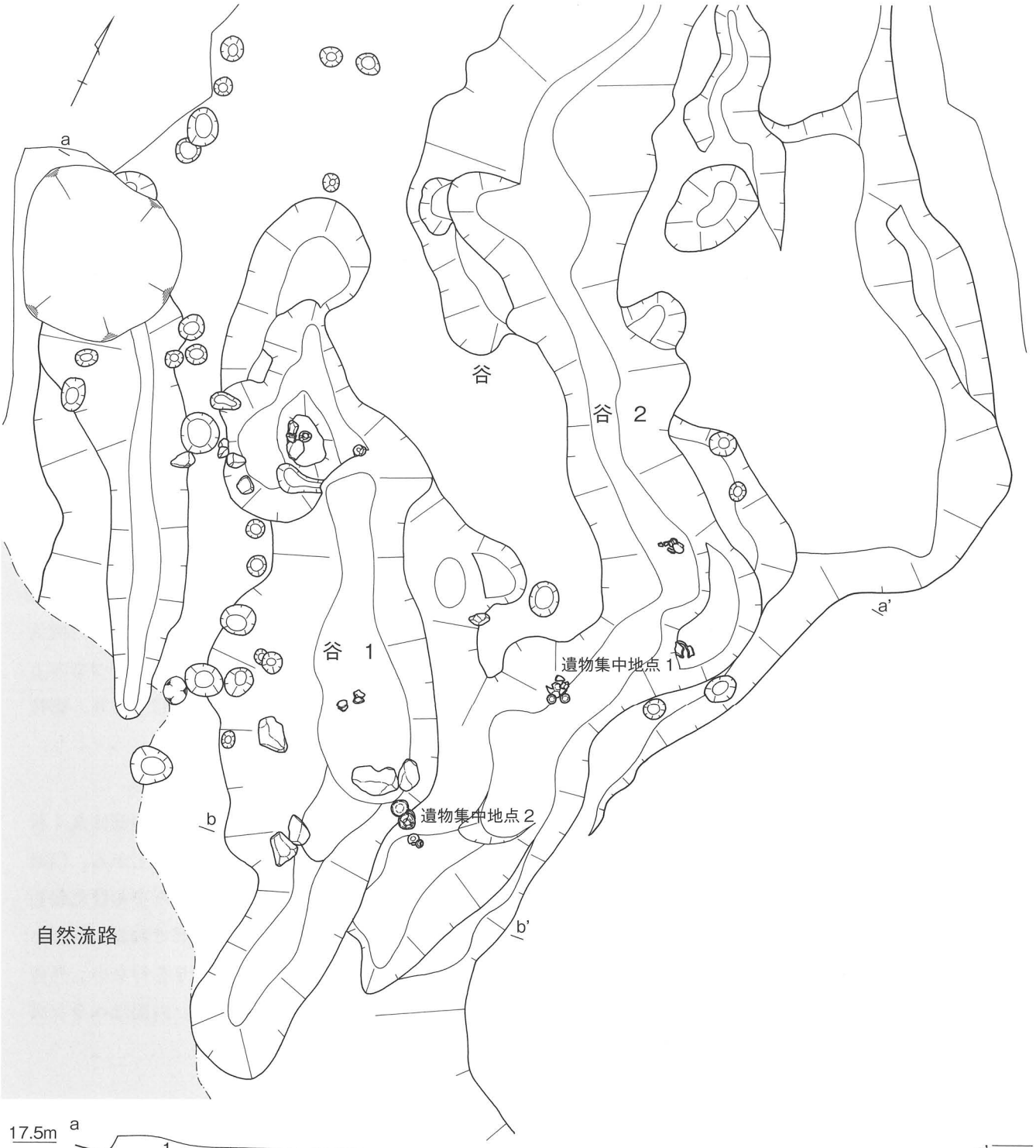
43は短頸壷である。やや外反する頸部で、口縁端部は上下に肥厚させている。

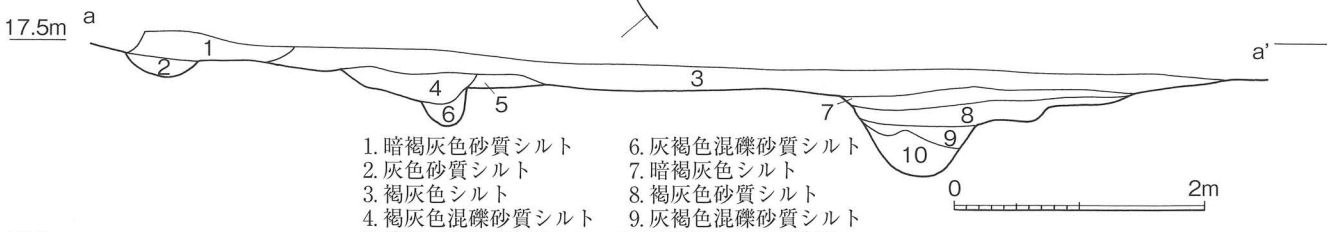
54～56は甕である。54は頸部からほぼ直線的に口縁部が立ち上がる。口縁端部は丸く収める。内外面共にハケメを施す。55は頸部から強いナデにより口縁部が立ち上がる。口縁部はやや内湾する。口縁端部は内外面を肥厚させて、口唇部上面にやや丸みをおびた端面をもたせている。56は球形の体部からほぼ直線的に外方へと延びる口縁部である。頸部と口縁部外面にはナデが施され、口縁端部はやや外反する。口唇部は面取りを行ない、外面に端面をもつ。体部外面はハケメで、肩部に横位のハケメを施している。内面はヘラケズリを施し、内面底部には指頭圧痕が残る。

44、45は小型器台と考えられる。共に内面中空である。

44、45は上下を共に欠損しており、全体の形状は不明である。44は、全体的に摩滅を受けており、調整痕は明らかではない。45の脚台部外面のユビナデの方向および、内面が「くの字状」に屈曲する部分の下には指頭圧痕が認められることから内面に指頭圧痕が認められない方が上として判断した。

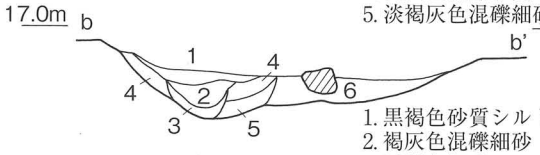
47は体部下部を欠損するが、48と共に、小型丸底壷に分類されるものである。47は球形の体部からほぼ直線的に延びる口縁部である。内外面共摩滅を受けており、調整痕を観察することはできない。48は球形の体部から、内湾気味に口縁部が立ち上がる。体部外面は摩滅を受けていることから調整痕は明らかではないが、肩部にヨコナデを施している。体部内面にはわずかに指頭圧痕が認められる。





1. 暗褐灰色砂質シルト
2. 灰色砂質シルト
3. 褐灰色シルト
4. 褐灰色混礫砂質シルト
5. 淡褐灰色混礫細砂
6. 灰褐色混礫砂質シルト
7. 暗褐灰色シルト
8. 褐灰色砂質シルト
9. 灰褐色混礫砂質シルト
10. 灰褐色シルト質細砂

4～6　谷１埋土
7～10　谷２埋土



1. 黒褐色砂質シルト
2. 褐灰色混礫細砂
3. 灰褐色細砂
4. 灰褐色極細砂
5. 灰褐色細砂
6. 褐灰色砂質シルト

1～4　谷１埋土・6　谷２埋土

fig.13　谷１・２平面・断面図

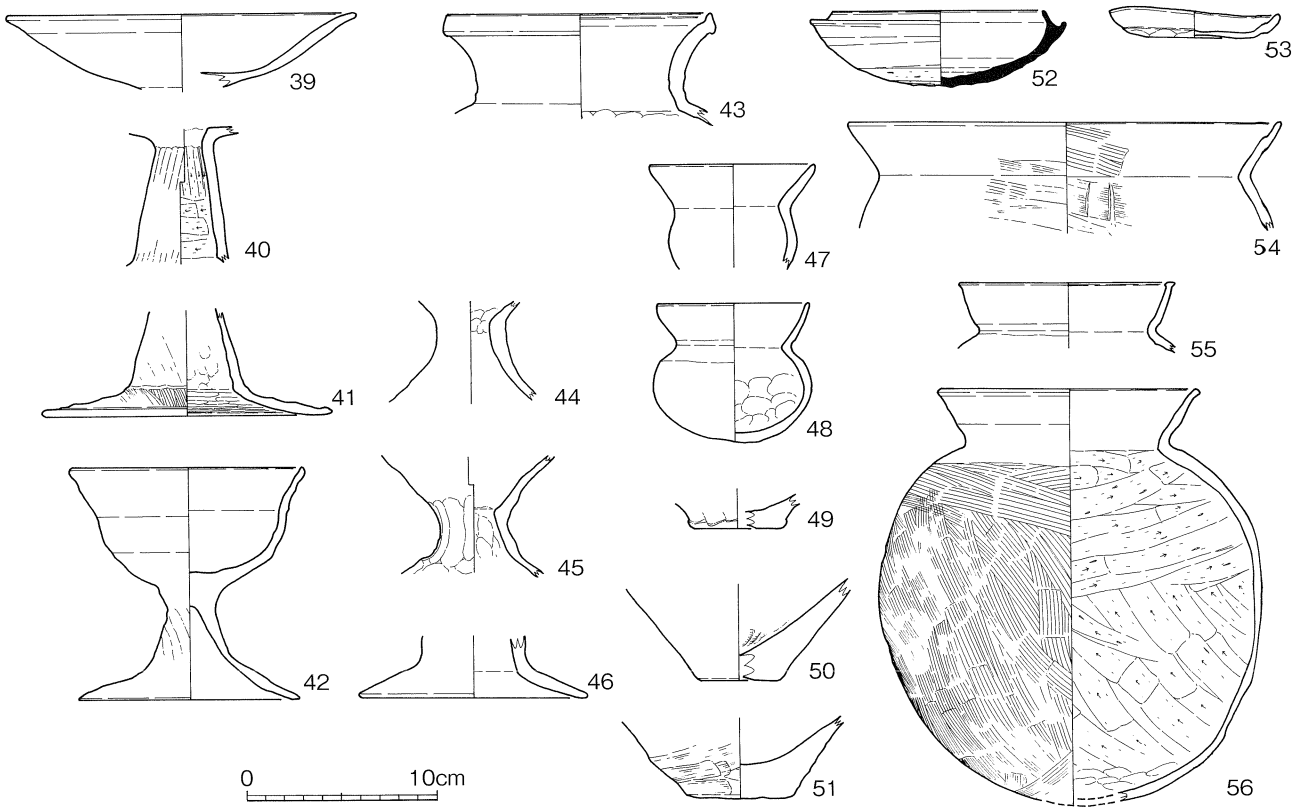


fig.14　谷１出土遺物

53は土師器皿で口径8.9㎝、器高1.6㎝である。体部外面下半には指頭圧痕が認められ、上半から口縁部にかけて一段のヨコナデを施す。平安京出土の土器編年におけるⅤ期新段階～Ⅵ期にかけての土師器皿と類似しており、12世紀後葉の時期が考えられる。

須恵器　52は須恵器坏身で口径11.0㎝、器高4.0㎝である。立ち上がりはやや低く、内傾する。田辺昭三氏の編年によるTK43～TK209型式に併行するものと考えられる[4)]。

これらの出土遺物は52の須恵器坏身、53の土師器皿以外は古墳時代前期の布留式併行期の遺物であると考えられる。56の布留形甕のわずかに長い球形の体部、肩部にヨコハケを施している点から、寺澤　薫氏による編年の布留２式～３式に併行するものと考えられる[5)]。また、52の須恵器坏身は６世紀後葉、53の土師器皿が12世紀後葉と考えられることから、谷１は平安時代末～鎌倉時代初頭頃には埋没していたことが推定され、古墳時代の遺物は埋土と共に流入したものと考えられる。

谷　2　谷２は、谷１の東側に位置する。ほぼ南北方向の谷で、途中で南東に向きを変え、再び南へと蛇行している。幅1.0m～2.4mで、検出面からの深さは北壁沿いで0.71m、中央部で0.94m、南側で0.33mである。南側を谷１に切られる。谷２では、２ヶ所で祭祀に関連するものと推定される遺物集中地点を検出した。また、埋土中からは中世の遺物と共に古墳時代後期の遺物が出土した。

遺物集中地点１　北から南へと下がる谷２が南東に向きを変え、再び南へと向きを変えた地点からやや南側で遺物が集中して出土した。谷２の西側寄りに土師器皿２点、須恵器椀１点が谷の底より0.5m上から、すべて口縁部を上に向けた状態で出土した。この状況から谷２がある程度埋没した段階で、谷内に遺物を据えたものと推定され、この出土状況から祭祀に関連す

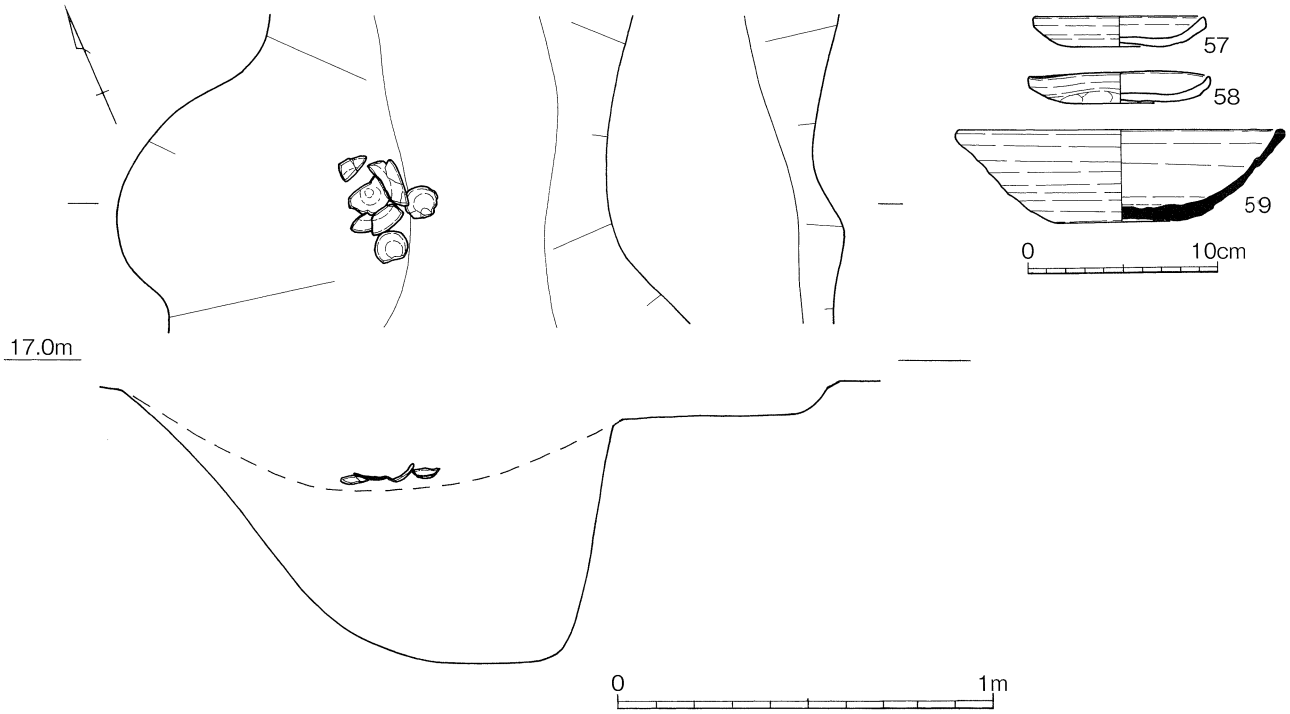


fig.15　谷２遺物集中地点１平面・断面図・出土遺物

るものと考えられる。

出土遺物　57と58は土師器小皿、59は須恵器埦である。

57は口径8.8cm、器高1.6cmである。体部外面上半から口縁部下に一段のヨコナデを施す。口縁端部外面に面をもち、口縁端部の断面はやや三角形を呈する。58は大きく歪む。体部外面下半に指頭圧痕が確認でき、体部外面上半から口縁部下に一段のヨコナデを施す。

59は須恵器埦で口径16.9cm、器高4.9cmである。回転糸切の底部から、やや内湾した体部が立ち上がる。底部内面の見込みはごくわずかに凹む。

これらの出土遺物は、土師器皿は平安京出土の土器編年におけるⅤ期～Ⅵ期にかけてのものに類似し、須恵器埦については12世紀後半頃の時期が考えられる。

遺物集中地点２　谷２の南端付近の、谷１との切り合い付近からも遺物集中地点が検出された。土師器大皿２点、土師器小壷１点、須恵器埦１点、白磁皿１点、鉄製小皿１点が出土した。遺物は北西から南東方向に一列に並び、北西側から土師器大皿１点、その南東側に土師器大皿内に須恵器埦を口縁部を上にして据えている。少し離れて鉄製小皿の上に白磁皿を底部を上にして伏せ、その南東には土師器小壷が置かれていた。谷２の底部から0.05m前後上で出土している。遺物集中地点１と同様に、谷がある程度埋没した段階で遺物を据えたものと推定され、遺物の出土状況から祭祀に関連するものと考えられる。

出土遺物　60は土師器壷、61は白磁皿、62、63は土師器大皿、64は須恵器埦、65は鉄製小皿である。

60の壷は口径4.4cm、器高4.1cmの小型品で、体部外面にわずかに煤が付着している。

61は口径10.4cm、器高2.7cmで、底部からやや内湾気味に体部が立ち上がる。平高台の外面のみ露胎である。口径に対する底径の比率、底部からの体部の立ち上がりなどにやや違いはあるが、横田賢次郎氏・森田　勉氏の分類による、白磁皿Ⅵ類に分類されるものと思われる[6)]。

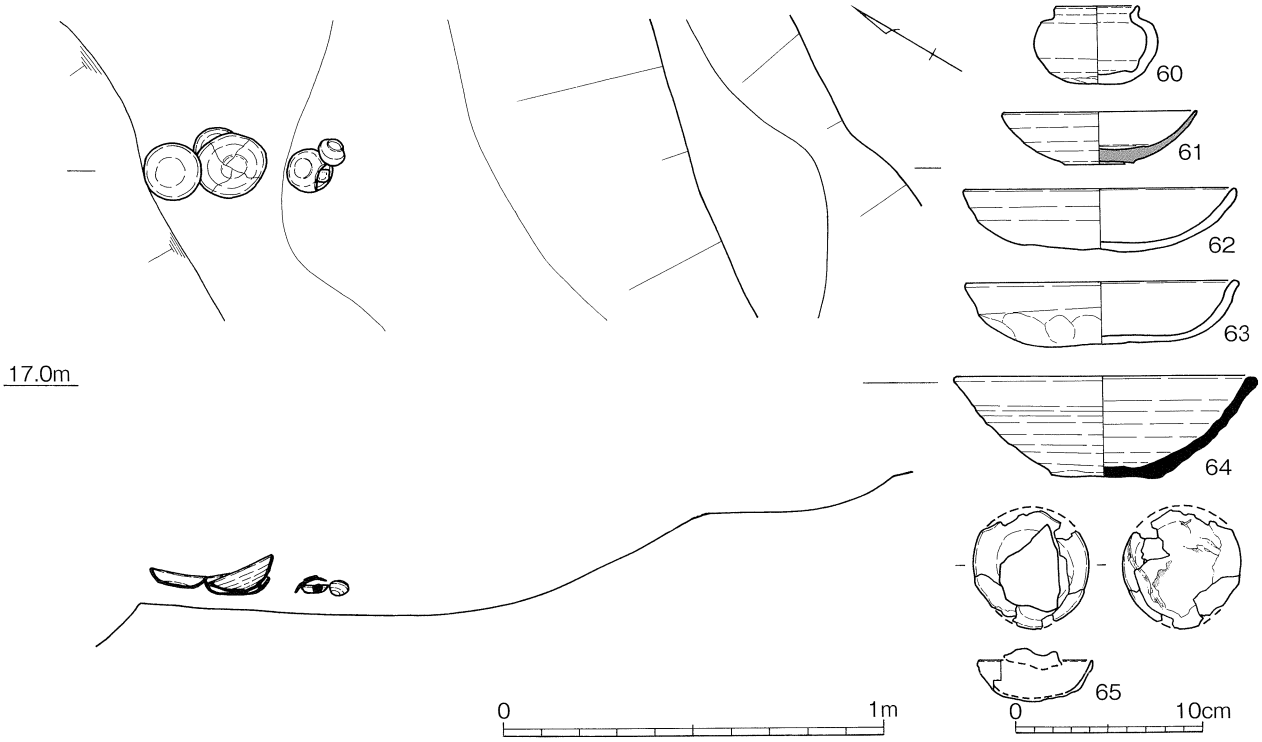


fig.16　谷２遺物集中地点２平面・断面図・出土遺物

62と63は、共に口径14.2cm、器高3.4cmである。62はやや内湾気味に立ち上がる体部で、口縁部は丸く収める。体部外面の上半から口縁部下に二段のヨコナデを施す、63は底部からの立ち上がりの角度は急で、口縁部はやや外反する。体部外面下半には指頭圧痕が認められ、上半から口縁部下にかけて一段のヨコナデを施す。内外面共にわずかに煤が付着する。平安京出土の土器編年におけるⅤ期新段階～Ⅵ期にかけての土師器大皿に類似する。

64は須恵器椀で、口径15.6cm、器高5.4cmである。回転糸切の底部からやや内湾気味に体部が立ち上がる。口縁部はやや肥厚し、口縁端部は丸く収めている。底部内面見込みの凹みはわずかである。12世紀後半頃の時期が考えられる。

鉄製小皿

65は鉄製の小皿で、口径6.2cm以上、器高2.0cmを測る。器壁の厚さは2.0mm前後である。形状はやや丸味を帯びた直径約4.5cmの底部より、やや内湾しながら口縁へと立ち上がる。X線透過画像による観察では、劣化の進行のためにわかに判断し難いが、スの存在が認められることから、鋳造品の可能性がある。また器内には、黄褐色を呈する鉄サビ状の塊が入っており、X線透過画像から、サビ塊の上に長軸5.2cm、厚さ約7.0mmを測る、鉄板状の鍛造品が付着することが認められた。また、器外面全体には、最長4.5cmを測る中空繊維の銹着が認められる。この繊維痕は、草本類が器底面に付着したものであると考えられる。

谷２出土遺物

谷２埋土中からも古墳時代の遺物が出土している。(fig.17)

66は土師器鉢のミニチュア品と考えられる。口径10.0cmに復元され、口縁部外面下にナデが施され、体部外面下部に指頭圧痕が認められる。内面はナデ調

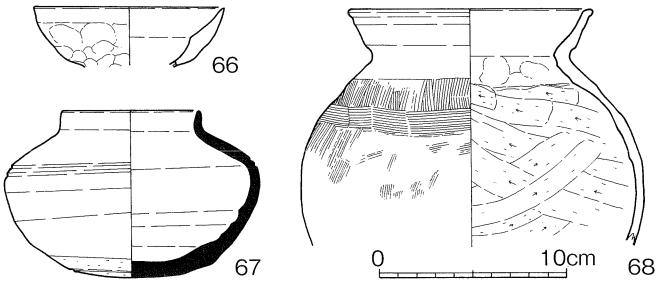


fig.17　谷２出土遺物

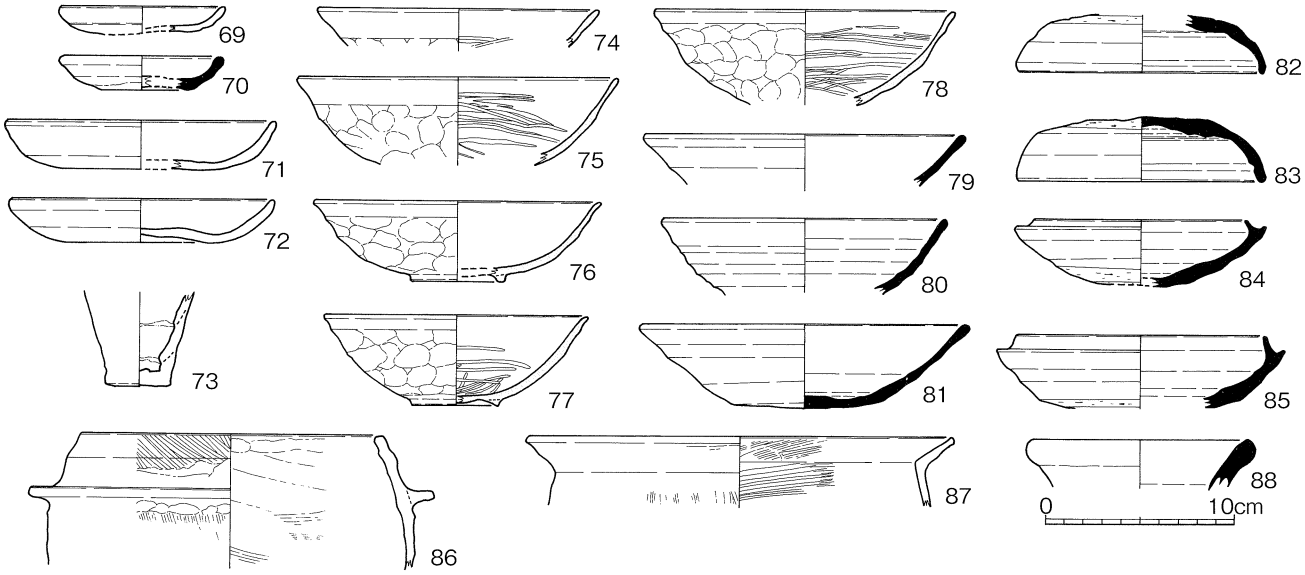


fig.18　谷出土遺物

整である。67は須恵器短頸壷で、口径7.0cm、器高8.8cmである。田辺昭三氏の編年MT85～TK43型式に併行するものと考えられる。68は土師器甕で、口径は12.8cmである。球形の体部からやや内湾気味に口縁部が立ち上がる。頸部の外面にはナデを強く施している。体部外面はハケメで、肩部に横位のハケメが施される。体部内面はヘラケズリで、頸部に指頭圧痕が認められる。布留式に併行するものである。

谷出土遺物

谷１、２が埋没後、谷全体を埋めた埋土中からも多数の遺物が出土した。(fig.18)

69、71～73、86、87は土師器である。74～78は瓦器、70、79～85、88は須恵器である。

69は土師器小皿で口径8.6cm、器高1.5cmである。体部から口縁部下に一段のヨコナデを施す。71、72は土師器大皿、71は口径14.2cmに復元され、器高は2.6cmである。体部から口縁部下に一段のヨコナデを施す。72は口径13.8cmに復元され、器高は2.3cmである。体部から口縁部下に二段のヨコナデを施す。

70は須恵器皿で口径8.2cmに復元され、器高は1.8cmである。底部外面は糸切りである。

74～78は瓦器椀で、口径は13.8cm～16.8cmに復元される。器高は76で4.2cm、77で4.8cmである。すべて和泉型に分類されるもので、体部外面に指頭圧痕が顕著である。口縁部下外面にはヨコナデが施され、体部内面には圏線状のヘラミガキが施される。

79～81は須恵器椀で口径は79、81で16.8cm、80は15.0cmである。

82、83は須恵器坏蓋で口径は83が12.7cm、器高3.4cmである。84、85は須恵器坏身で、口径は84で9.2cmである。共に立ち上がりは小さく、内傾する。

86は土師器羽釜で、鍔はわずかに上方に突出する。87は土師器の甕である。

自然河道

谷の南側を切る自然河道からは近世の陶磁器と共に、中世の遺物が出土したことから、近世には埋没した河道と推定される。

89は瓦器皿、90は白磁皿、91は須恵器椀、92は土師器鍋脚である。

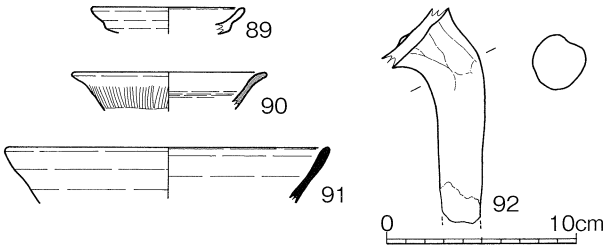


fig.19　旧河道出土遺物

第３章　まとめ

第１節　古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では古墳時代の遺物は前期と後期のふたつの時期の遺物が出土した。ここでは近隣の調査データと比較し、出土遺物の性格について述べたい。

(1) 古墳時代前期の遺物

今回の調査で出土した古墳時代前期の遺物は、調査区東半部SK03、谷状地形のテラス状になった部分において検出されたSK09、調査区南東角で検出された落ち込み状のSX01及び、谷状地形内から出土した。特に谷１からは中世の遺物と共に多くの遺物が出土しており、中世の土地開発などに伴い谷内へ流入したものと考えられる。本調査地の西方に位置する第７次調査においても古墳時代前期の掘立柱建物、自然流路が検出され、自然流路の肩部からは布留式併行期の多量の遺物が出土していることから、西側の高位部に大規模な集落の存在が推定されている[7)]。谷内からの出土遺物もこれに関連する可能性がある。また、第７次調査では中期後半段階の溝が検出され、本調査地の西側に近接する第６次調査においても、自然河道内から中期後半段階の遺物が比較的集中して出土している[8)]。これらから現在の宮川小学校の西側から北西側の丘陵高位部には、前期～中期後半の大規模な遺構、遺物の分布が推測される。今回検出したSK03、SK09、SX01などは中世期の開発に削平を逃れたか、或いは深い深度であったため遺存した遺構と考えられ、調査地付近にも当該期の遺構の分布の拡がりが推察される。

出土した遺物のSK09出土土師器甕（fig.8-2）や、谷１出土土師器甕（fig.14-56）は、布留型の甕であるが、体部が球形に近い形状から、わずかに長胴化傾向を示していることから、布留式併行期の中でもやや新しい要素を持つものと思われる。また、谷１からの出土遺物には、土師器小型丸底壷、高坏の他、小型器台と考えられる器種などが多く含まれている点から、これらの出土遺物が、祭祀に関連するものである可能性も考えられる。

(2) 古墳時代後期の遺物と古墳群との関連性

長田神社境内遺跡の所在する長田区北部では、丘陵部にかつて複数の古墳群が存在したことが知られている。今回出土した古墳時代後期の遺物との関連も含めて、調査地付近における主要な古墳群との関係を見てみたい。

池田古墳群　池田古墳群は、現在の長田区池田経町、池田上町、大谷町付近の高取山南麓の丘陵上に存在したとされる。その多くは過去の開発によって消滅したものと考えられ、内容の明らかなものはわずかであるが、池田寺町の野々内古墳群から６世紀後半頃の遺物が採集されている。また、池田経町に所在した、観音山古墳は昭和25年（1950）頃、公園造成により消滅した古墳で、造成に伴う削平の際に横穴式石室が現れたとされる。出土遺物として６世紀末葉頃の須恵器坏蓋、坏身、平瓶などが現存している[9)]。また、平成12年度に実施された長田神社境内遺跡第14次調査において、飛鳥時代の遺物が出土し、西側の丘陵部に古墳の存在が指摘されているが[10)]、調査地の立地から、池田古墳群に含まれるものとも考えられる。

大塚群集墳　長田区大塚町付近にはかつて数多くの古墳が存在したとされるが、古くから開発が進み、現存が確認できるものはない。大正時代頃までは一部が残されていたものとみられ、大正８年（1919）に福原潜次郎（会下山人）氏が、長田神社の北方400m～500mの字大塚（現在の長田区大塚町付近）において２基の古墳を調査した記録[11]がある。石槨内から多数の須恵器と共に刀剣類が出土したとされる。また、これら２基の古墳の北方には、さらにもう１基が存在したことが記され、これらの古墳の近隣には「大塚」と呼称される古墳が削平を受けながらも一部が遺存し、須恵器が散乱していた状況が記録されている。昭和31年度に刊行された『神戸地方古墳地名表』には大塚群集墳として記載され「大塚群集墳　大塚町三～九丁目　大塚町の辺に巨大なるものありたり、その近くにも二、三ありたれど今なし、盛俊塚あり、(以下略)」との記載がある[12]。

古墳群との関連性　谷状地形から出土した古墳時代後期の遺物は谷１に比べて、東側の丘陵側の谷２に集中している。谷内からの出土遺物は、谷１出土の須恵器坏身（fig.14-52）、谷出土fig.18-82、83の須恵器坏蓋、fig.18-84、85の坏身が田辺昭三氏の編年によるMT85型式～TK209型式にかけての時期に併行するものと考えられ、谷２出土の須恵器短頸壷fig.17-67はMT85型式～TK43型式に併行するものと考えられることから、これらの須恵器は６世紀後半頃の時期が考えられる。６世紀中頃～７世紀前半にかけては、六甲山南麓地域に横穴式石室を主体とする群集墳が築造される時期であり[13]、６世紀後半の遺物が出土した野々内古墳や、TK217型式に併行すると考えられる遺物が出土した、観音山古墳を含む池田古墳群もこの時期に築造されたものと思われる。長田神社境内遺跡では、これまでの調査では６世紀中頃～７世紀前半にかけての遺構は、第５次調査で後期の竪穴住居、第14次調査で飛鳥時代とされるピットが確認されている以外は、ほとんど確認されていない。調査地付近からはこれまでに６世紀後半代の遺構は検出されておらず、出土遺物は調査地の東側丘陵からの流入であると考えられることから、第５次調査における後期の竪穴住居の検出を踏まえて、東側の丘陵部に集落域を想定するよりも、集落域は調査地の南側に存在するものと推定される。これらの点から、谷からの出土遺物は、かつて大塚町一帯に存在したとされる、大塚群集墳に関連するものである可能性も考えられる。また、調査地北方に位置する長田区林山町には、６世紀後半に操業したと考えられる林山古窯址が存在している。これまでに発掘調査が実施されておらず、詳細は不明であるが、確認されている遺物は、今回の出土遺物の時期とも重なることから、これら古墳群との関連も含めた検証が必要であろう。

今回出土した遺物は、中世の遺物と共に谷埋土に流入している点や、東側の谷２に遺物の集中がみられる点から、調査区東側の丘陵からもたらされたものと考えられる。かつて大塚町付近の丘陵部に存在した古墳群が平安時代末以降に開墾、若しくは土地の改変が行なわれた際に、遺物が土砂と共に谷内に流入した可能性もある。その後、土地開発が進行し、最終的には大正時代の造成により、わずかに残されていた古墳も消滅したものと考えられる。市街地化の進んだ現在、地表から古墳の存否を確認することはできないが、古墳の痕跡や遺物の出土など、今後、近隣地の調査の進展により大塚群集墳に関連する遺構、遺物が確認される可能性もあると考えられる。

第２節　中世の遺構と遺物

(1) 中世の遺物と祭祀

今回の調査では、SK06から多くの遺物が出土した他、谷２から遺物集中地点２ヶ所が検出された。これらは遺物の出土状況から祭祀に関連するものと考えられる。

土師器皿はfig.16-62の大皿体部外面に二段ナデがみられる他は、一段ナデのタイプがほぼ大半を占める。鍬柄俊夫氏は、この段階における西摂地域の手捏ね成形土師器皿は京都型として、その変化は平安京出土土師器を比較的忠実に模倣している点を指摘しており[14]、この点から、これらの土師器皿は、平安京出土土器編年のⅤ期新段階～Ⅵ期古段階（12世紀後半～13世紀初頭）にかけて、併行する時期が考えられる。

須恵器椀は回転糸切の底部で、平高台はfig.11-34、35にやや名残が見受けられるが、大半は消失しており、底部内面見込みはわずかに残存するものの凹みは浅い。体部がやや丸みを残す所から、12世紀後半～末葉頃の時期が考えられる。

瓦器椀はすべて和泉型に分類されるものである[15]。SK06出土のfig.11-29、30は外面の口縁部下に施されたヨコナデが二段であることや、底部の貼り付け高台がわずかに高さを保っている点、体部がやや丸みを保つことから、和泉型瓦器椀の編年のⅢ期でも前半（12世紀後半～13世紀初頭）に併行するものと考えられる。

これらの特徴から考えると、土師器皿が一段ナデのものが大半を占める点や、SK06からの出土遺物fig.11-30の瓦器椀のように、器高が低いやや新しい要素をもつものが見受けられることから、ほぼ12世紀後半～13世紀初頭にかけての時期が考えられる。

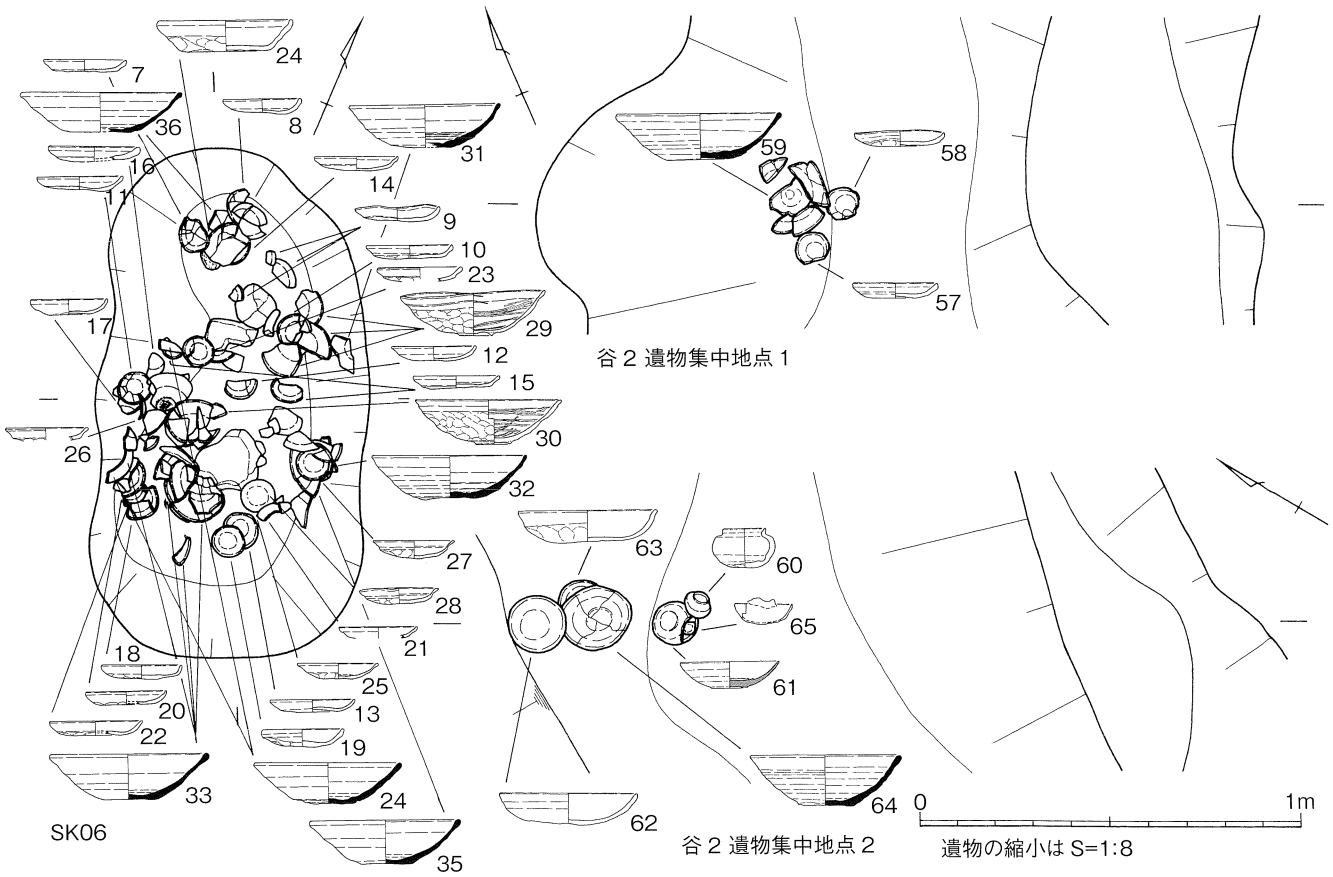


fig.20　SK06・谷２遺物集中地点遺物出土状況図

祭　祀　　これらの遺構、および出土遺物は、出土状況から祭祀に関連するものである可能性が高いことは、すでに前章でも述べたが、遺物の出土状況から祭祀を考える場合には、慎重な検証が必要である。久世康博氏は京都市内における埋納（祭祀）遺構の分析[16]から「単に遺物が投棄されたような状態ではなく、意図的に埋められた状態で発見されている遺構」と指摘しているが、SK06および谷２の２ヶ所の遺物集中地点は祭祀のあり方の一例として、挙げられるものであろう。

SK06については、出土遺物の状況から小皿を並べた後に、重ねた須恵器椀をそれほど高くない位置から石の上に落とし、破砕させている状況が確認できる。瓦器椀については明確ではないが、破片が大きく拡散している状況ではない事から、破砕は行なっていない可能性がある。

谷２では、谷の底からある程度埋没した段階で、遺物が据えられている遺物集中地点が確認された。遺物集中地点１では須恵器椀１点、土師器小皿２点が出土し、遺物集中地点２では土師器大皿２点、須恵器椀１点、合口にした鉄製小皿と白磁皿各１点、土師器小壷１点が一列に出土している。

遺物集中地点２では、鉄製小皿（fig.16-65）を用いているが、地鎮に関連するものとして、鉄刀を使用した例[17]があり、祭祀において金属器を使用した１例であろう。鉄製小皿の外面全体には植物の草本類の銹着がみられることから、器底面に植物の草本類が付着したものと見られる。土器類の下に、植物の草本類を意図的に敷いたものであるのか、自然に生えていた植物の上に、土器類を並べたのかは不明であるが、祭祀の形態のあり方を示すものとして特筆できる。また、谷２は祭祀場として利用された可能性があり、谷２における土器集中地点１・２の遺物の出土状況を検証する場合、遺物を据えた意図を、どちらの方向から見るかによりその解釈は変わるが、調査区の西側が斜面地として緩やかに上がり、南西側が自然河道となっている状況から、遺構の分布がみられる緩斜面地である東側からの意識も考えられる。

(2) 長田神社との関係

これまでの長田神社境内遺跡での発掘調査では、平安時代後期～鎌倉時代に至る段階の遺構、遺物の検出は、長田神社南方の第１次調査での平安時代の土坑墓、鎌倉時代の井戸、集石を伴う落ち込みの検出以外は、第６、７、８、14次調査と長田神社北方に集中する傾向が見られる。続く中世後半の段階では第６・８次調査で、鎌倉時代後半～室町時代前半の人頭大の石材を伴う落ち込みや土坑、井戸が検出されており、遺構の一部は祭祀に伴う可能性があり、長田神社、長福寺との関連性が指摘されている[18]。このほか第７次調査では江戸時代中期以降の長田神社の神官屋敷地に関連するものと推定される遺構が検出され、その区画が15世紀後半～16世紀初頭の方形区画を踏襲していることが確認されている[19]が、現在の長田神社境内地およびその近隣地は、第11次調査以外は、未だ本格的な調査は実施されておらず、その実態は不明な点が多い。しかし、現状では平安時代後期～室町時代にかけての遺構、遺物の分布状況から祭祀に関連すると考えられる遺構は、長田神社北東側の宮川小学校付近に集中する点と、かつて苅藻川が宮川と呼称され、調査地東

側の丘陵が宮山と呼ばれたとされる伝承[20]が、存在することなどからも、調査地付近が長田神社と密接な関係にあった可能性が窺われる。調査地周辺でこれまでに確認されている遺構群と今回検出された祭祀に関連するものと考えられる複数の遺構との関係も、今後の調査の進展により、その関係はさらに明らかになるものと思われる。

第３節　おわりに

今回の調査では、古墳時代と中世の遺構、遺物が検出された。今回出土した古墳時代後期の遺物は、中世の開発により削平された古墳に関係するものとも推定され、調査地周辺にかつて存在したとされる、大塚群集墳にも関連する可能性も考えられる。また、中世の祭祀に関連するものと推定される、複数の遺構や、遺物が出土するなど、その成果には、大きなものがあった。中世の遺構、遺物については、長田神社周辺における中世の状況や祭祀のあり方を考察する上で、貴重なデータとなったと言えよう。しかし、長田神社境内遺跡の全体像には不明な点が多く、その解明には未だ程遠い状況にある。今後の調査の進展により、解明は進むものと考えられるが、今回の調査成果は、今後、長田神社境内遺跡全体を考える上で、貴重な資料を提供したと言えよう。

註

1）平安京出土土器の編年観は下記による。
古代の土器研究会編『古代の土器３　都城の土器集成Ⅲ』古代の土器研究会　1994

2）和泉型瓦器椀の編年観は下記による。
尾上　実・森島康雄・近江俊英「瓦器椀」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　1995

3）中世須恵器の編年観は下記による。
森田　稔「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　1995

4）古墳時代の須恵器編年観は下記による。
田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981

5）古墳時代の土師器編年観は下記による。
寺澤　薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県教育委員会　1986

6）横田賢次郎・森田　勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』４
九州歴史資料館　1978

7）岡本敏行・大道和人・菊池吉修「長田神社境内遺跡　第７次調査」『平成８年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1999

8）第６次調査では自然河道内から、多量の土師器が須恵器を伴い出土している。
前田佳久・井尻　格「長田神社境内遺跡　第６次調査」『平成８年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1999

9）森田　稔「長田区観音山古墳の出土遺物」『神戸市立博物館だより』No.23　神戸市立博物館　1988

10）須藤　宏「長田神社境内遺跡　第14次調査」『平成12年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2003

11）福原潜次郎氏の報告では、大正８年（1919）８月25日に長田村耕地整理に伴い、「長田神社の北方四、五丁の字、大塚の地」で「南北に連接して築かれてある」２基の古墳の調査がされ、この２基の古墳の主体部は石槨として、「いずれも、その石槨の造り方が頭部を広く脚部をせまくして一見船形のよう」で「この形の石槨は、この地方では、いと珍しい構造である。」とされている。
福原源九郎『明治百年記念号　神戸市内町名由来期（中）ほか二篇』（故福原会下山人　郷土史話シリーズNo.19）1967

12）神戸地方古墳調査保存準備の会編『神戸地方古墳地名表－旧武庫・菟原・八部・有馬・美嚢・明石の各郡』　神戸市経済局観光課・神戸地方古墳調査保存準備の会　1956

13）喜谷美宣「古墳時代」『新修神戸市史　歴史編Ⅰ　自然・考古』神戸市　1989

14）鋤柄俊夫「中世食器の地域性　６－畿内周辺」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集　国立歴史民俗博物館　1997

15）橋本久和氏は西摂地域出土の和泉型瓦器椀について、「和泉型はⅢ期を中心にほぼ全域に分布」、「在地で生産されたものと考えられるが詳しくは判らない。」としている。
橋本久和「第11章　瓦器椀の分布」『中世土器研究序論』真陽社　1992

16) 久世康博「京都市域における埋納（祭祀）遺構の集成」『研究紀要』第５号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1998

17) 本例よりもやや遡る時期の資料であるが、兵庫県内では三田市川除・藤ノ木遺跡のⅣ区SK112に鉄製刀子を埋納した例（11世紀後半）がある。また、京都府宇治市白川金色院跡の地鎮関連遺構（SX4101）にも鉄刀が埋納されている例（12世紀初頭から前半頃）がある。
山田清朝編『川除・藤ノ木遺跡』兵庫県教育委員会　1992
浜中邦弘編『白川金色院跡発掘調査報告書』宇治市教育委員会　2003

18) 前掲８）および
前田佳久・阿部敬生・阿部　功「長田神社境内遺跡　第８次調査」『平成８年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1999

19) 前掲７）

20) 苅藻川は長田神社のほとりでは「宮川」と呼ばれていたとの伝承がある。
神戸市教育委員会編『神戸の史跡』神戸新聞出版センター　1981
「宮山」の呼称の伝承には、福原潜次郎氏の記述がある。
前掲11）

参考文献

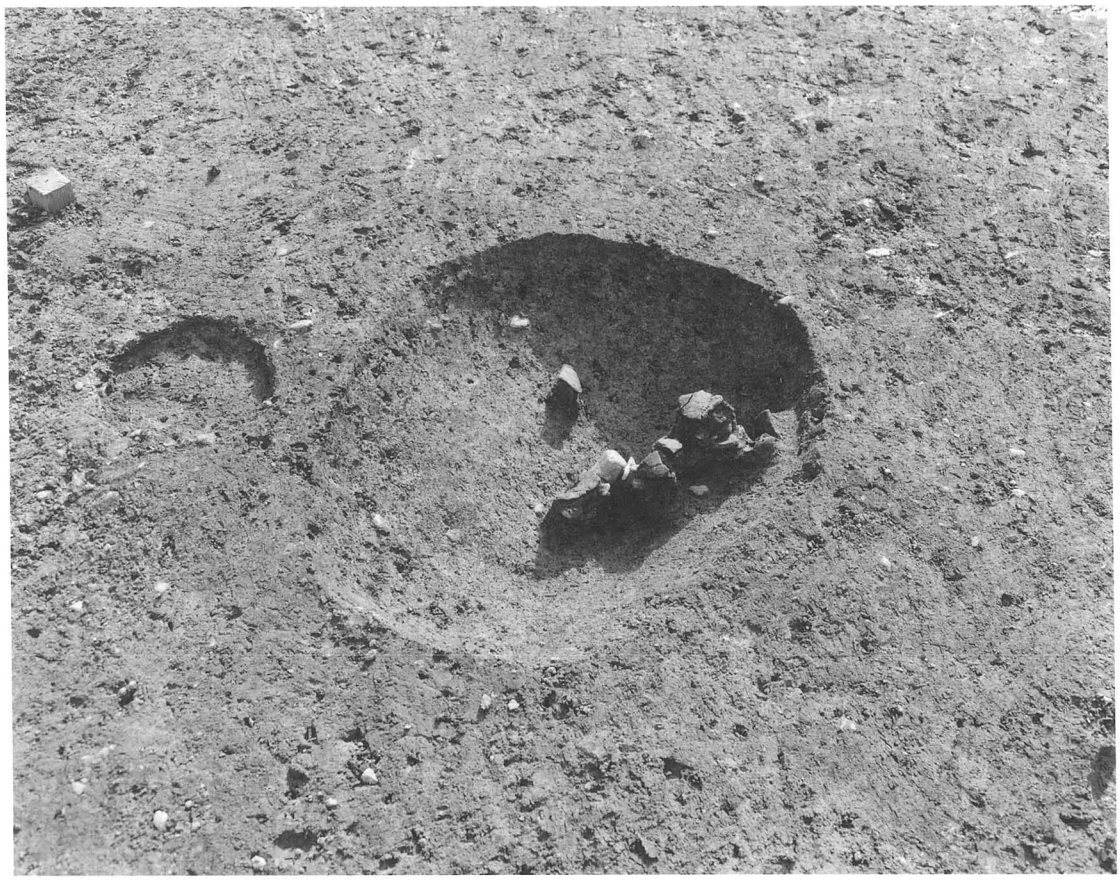
神戸市教育委員会編『＜神戸の民族芸能＞長田・須磨編』神戸市教育委員会　1978
宮本郁雄編『企画展示　神戸の古墳』神戸市教育委員会　2000
川上厚志編『二葉町遺跡発掘調査報告書　第３・５・７・８・９・12次調査』神戸市教育委員会　2001
稲沢正弘・渡辺伸行「神戸市長田区林山窯について」『神戸古代史』３－１神戸古代史研究会　1986
多賀茂治・菱田淳子・中川　渉他『玉津田中遺跡-第6分冊－』兵庫県教育委員会　1996
池田征弘編『神出窯跡群』兵庫県教育委員会　1998
別府洋二編『楠・荒田町遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会　2008
大平　茂「祭祀考古学の体系－新しい神道考古学の体系－」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第３号
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2003
新湊川流域変遷史編集委員会編『歴史が語る湊川　新湊川流域変遷史』神戸新聞総合出版センター　2002
竹内理三編『角川日本地名大辞典』兵庫県　角川書店　1988
網干善教・米田文孝・竹村忠洋・太田宏明・海邉博史編『八十塚古墳群の研究』芦屋市教育委員会・関西大学文学部考古学研究室　2002
白石耕治『陶器のムラに眠る人々－陶邑と周辺地域の古墳を考える』和泉市教育委員会　2007
清水靖男編『明治前期・昭和前期神戸都市地図』柏書房　1995

写　真　図　版

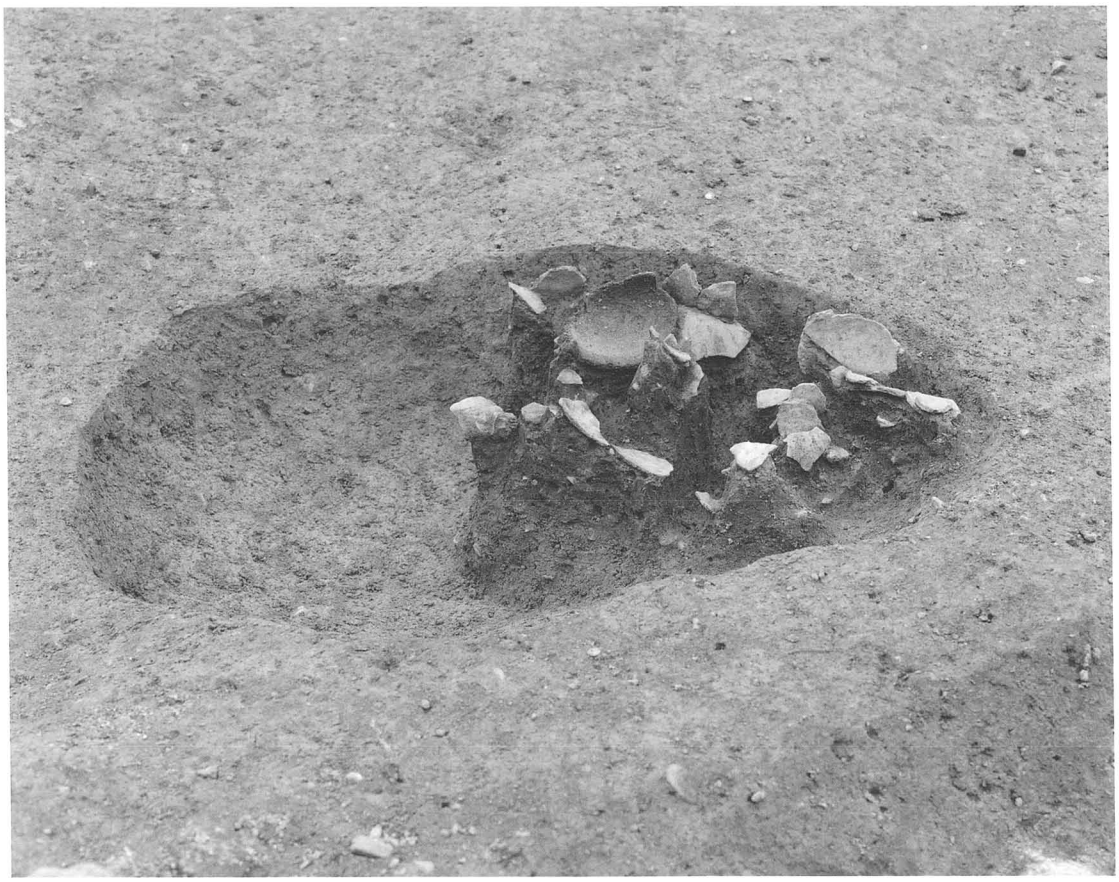
図版 1

調査地全景（南から）

調査地東半部全景（南東から）



SK03（北西から）

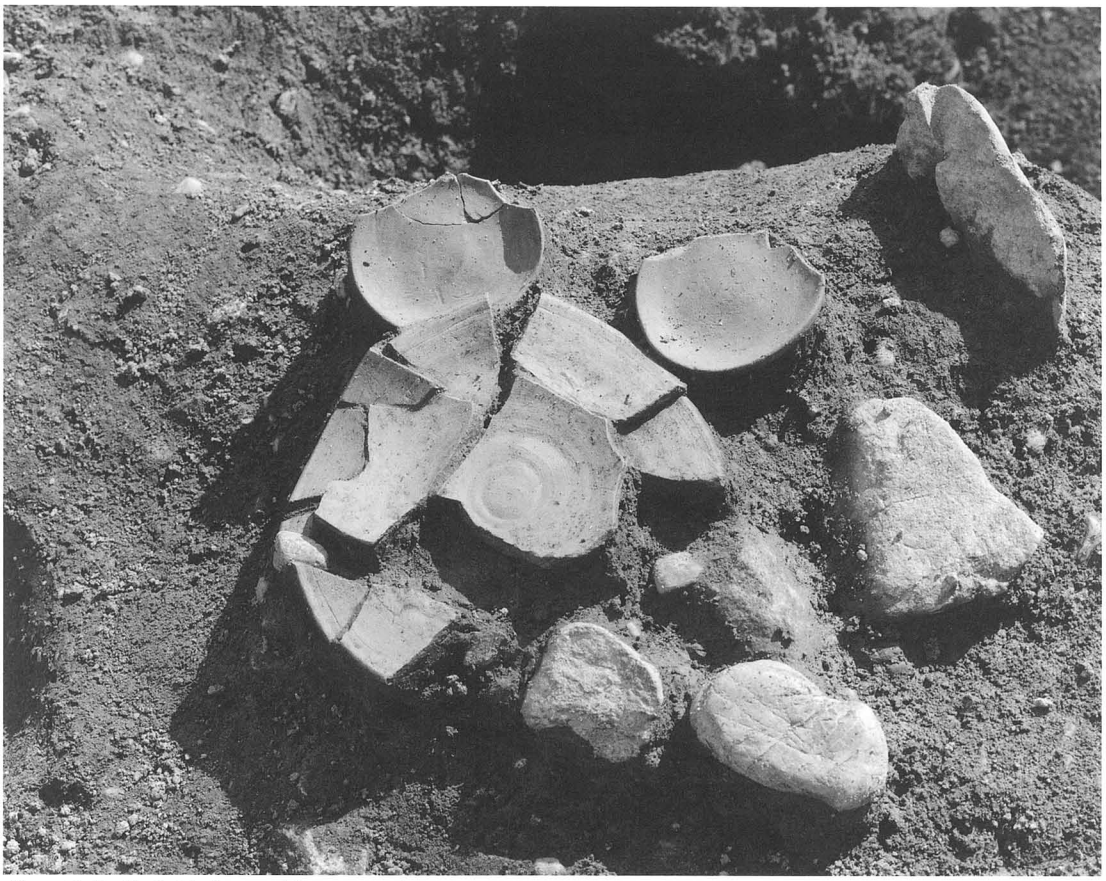


SK09（西から）

図版 3

SK06（北西から）

谷 2 遺物出土状況（北から）



谷２遺物集中地点１（北西から）

谷２遺物集中地点２（北から）

図版 5

2

56

SK09出土遺物

4

42

SX01出土遺物

45

48

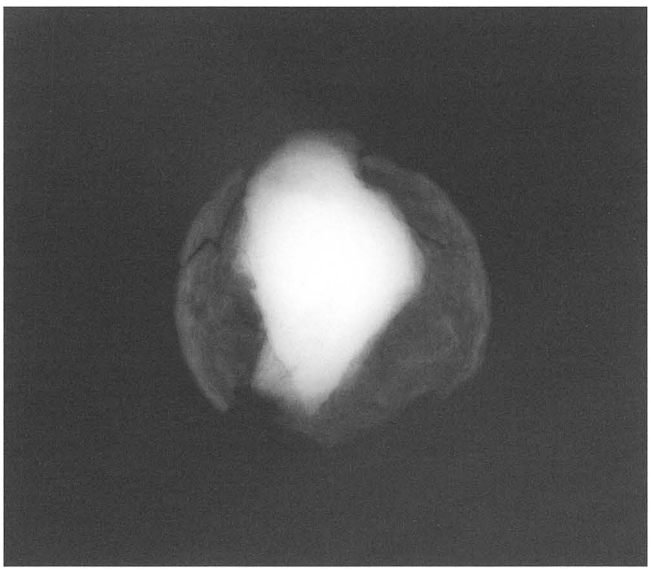
谷 1 出土遺物

SK06出土遺物

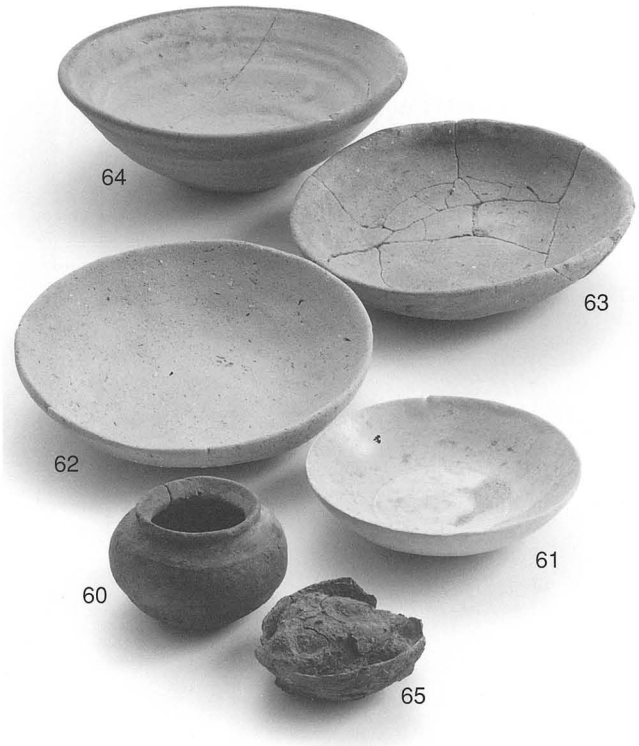
図版 7

谷 2 遺物集中地点 1 出土遺物

谷 2 遺物集中地点 2 出土鉄製小皿

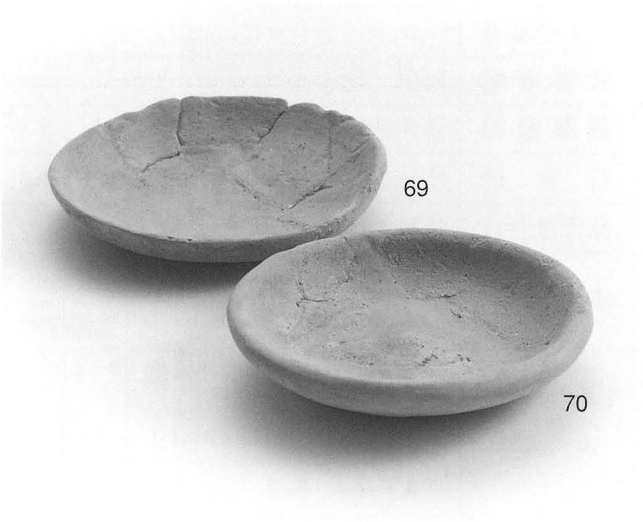


谷 2 遺物集中地点 2 出土鉄製小皿　X線透過像

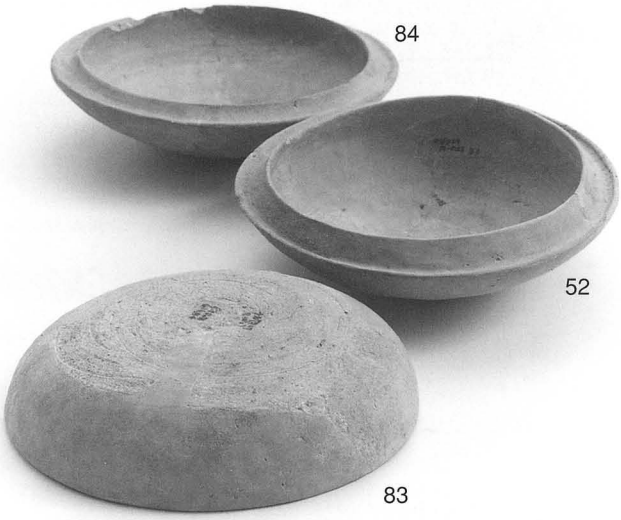


谷 2 遺物集中地点 2 出土遺物

谷 2 遺物集中地点 2 出土鉄製小皿



67



68

谷 2 出土遺物

谷出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながたじんじゃけいだいせきだい17じはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	長田神社境内遺跡第17次発掘調査報告書
副 書 名	神戸市長田区大塚町４丁目における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	阿部　功
編 集 機 関	神戸市教育委員会
所 在 地	〒650-8570　神戸市中央区加納町６丁目５番１号　TEL078－322－6480
発行年月日	西暦2008年12月26日

所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査原因
		市町村	遺跡番号			
長田神社境内遺跡（ながたじんじゃけいだいいせき）	兵庫県神戸市長田区大塚町（ひょうごけんこうべし ながたくおおつかちょう）4丁目4、5-2	28106	6-5	34度40分20秒	135度8分52秒	共同住宅建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長田神社境内遺跡	集落跡	古墳時代 中世	土坑、落ち込み、ピット、谷状落ち込み	土師器・須恵器・瓦器・白磁・鉄製小皿	

要約

今回の調査では、古墳時代と中世の遺構、遺物が確認された。遺構は調査地の東側に集中し、中世の祭祀と推定される土坑や、ピットが検出された。西側は谷状地形となっており、古墳時代前期および古墳時代後期の遺物が、中世の遺物と共に出土した。古墳時代後期の遺物は、調査地付近にかつて所在したとされる、大塚群集墳に関連するものである可能性も考えられる。谷内には、中世の祭祀と推定される遺物集中地点が２ヶ所で検出された。

長田神社境内遺跡第17次発掘調査報告書
－神戸市長田区大塚町4丁目における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2008.12.26

発　行　　神戸市教育委員会文化財課
〒650-8570　神戸市中央区加納町６丁目５番１号
TEL 078-322-6480

印　刷　　デジタルグラフィック株式会社
神戸市中央区弁天町１－１
TEL 078-371-7000

神戸市広報印刷物登録・平成20年度　第263号（広報印刷物規格Ａ－６類）